# 那珂 84

- 那珂遺跡群第 177・180 次調査報告 -

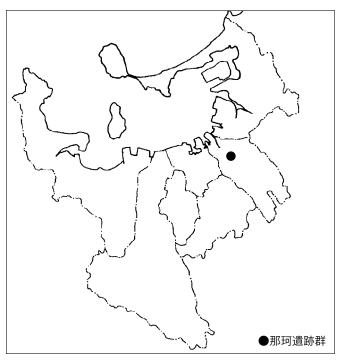
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1442 集

2022 福岡市教育委員会

# 那珂 84

- 那珂遺跡群第 177·180 次調査報告 -

# 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1442 集



遺跡略号 NAK - 177·180 調査番号 1947·2003

2022

福岡市教育委員会

序

北部九州は玄界灘を介して大陸・朝鮮半島と一衣帯水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。なかでも福岡市には、旧石器時代から近世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は事務所増築、共同住宅建設に伴う那珂遺跡群第 177・180 次発掘調査について報告するものです。この調査では弥生時代~中世の遺構・遺物が多数出土しました。これらは地域の歴史の解明のために重要な資料となるものです。今後本書が文化財保護についての理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、九州自動車リース様・事業者様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会教育長 星子 明夫

## 例 言

- 1. 本書は、福岡市教育委員会が事務所増築に伴い、福岡市博多区東光寺町1丁目19番1, 19番2 において発掘調査を実施した那珂遺跡群第177調査の報告書である。また、共同住宅建設に伴い、福岡市博多区東光寺町1丁目14, 17番において調査を実施した那珂遺跡群第180次調査の報告書である。
- 2. 発掘調査および整理・報告書作成は、第 177 次は民間受託、第 180 次は民間受託・国庫補助事業 として実施した。
- 3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
- 4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、清金良太・中園聡が行った。
- 5. 本書に掲載した遺物実測図の作成は、清金・井上加代子・山崎龍雄・山崎賀代子が行った。
- 6. 本書に掲載した遺構および遺物写真の撮影は、清金が行った。
- 7. 本書に掲載した挿図の製図は、清金が行った。
- 8. 本書に掲載した国土座標値は、世界測地系によるものである。
- 10. 本書で用いた方位は座標北で、真北より0°18′西偏する。
- 11. 遺構の呼称は、掘立柱建物をSB、竪穴住居をSC、溝をSD、井戸をSE、土坑をSK、方形周溝墓をSO、木棺墓・土坑墓をSR、甕棺墓をST、ピットをSPと略号化した。
- 12. 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
- 13. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 14. 本書の執筆および編集は、清金が行った。

遺跡名	那珂遺跡群	調査次数	第 177 次	遺跡略号	NAK - 177
調査番号	1947	分布地図図幅名	東光寺	遺跡登録番号	0085
申請地面積	1025.89 m²	調査対象面積	141.81 m²	調査面積	131.7 m²
調査地	福岡市博多区東光寺町1丁目19番1、19番2			事前審査番号	2019 - 2 - 410
調査期間	令和元 (2019) 年 10 月 7 日~ 11 月 20 日				

遺跡名	那珂遺跡群	調査次数	第 180 次	遺跡略号	NAK - 180
調査番号	2003	分布地図図幅名	東光寺	遺跡登録番号	0085
申請地面積	821.22m²	調査対象面積	305.98m²	調査面積	295.0 m²
調査地	福岡市博多区東光寺町1丁目14番、17番			事前審査番号	2019 - 2 - 742
調査期間	令和2 (2020)年4月8日~6月26日				

# 本文目次

Ⅰ. 遺跡の立地と環境	1
那珂遺跡群第 177 次調査	
Ⅱ. はじめに	7
1. 調査に至る経緯	7
2. 調査の組織	7
Ⅲ. 調査の記録	9
1. 調査の概要	9
2. 遺構と遺物	9
1) 掘立柱建物 (SB) ····································	9
2) 竪穴住居 (SC) ····································	10
3) 井戸 (SE) ····································	12
4) 土坑 (SK) ·····	17
5) 土坑墓 (SR) ······	17
5) 甕棺墓 (ST)····································	18
3. 小結	24
那珂遺跡群第 180 次調査	
Ⅳ. はじめに	27
1. 調査に至る経緯	27
2. 調査の組織	27
V. 調査の記録	
1. 調査の概要	29
2. 遺構と遺物	29
1) 溝 (SD) ·····	
2) 井戸 (SE) ······	30
3) 土坑 (SK) ·····	30
4) 方形周溝墓 (SO) ······	31
5) 土坑墓・木棺墓 (SR)	33
6) 甕棺墓 (ST)······	
7) その他の遺物	
3. 小結	47
VI 結語	40

# 挿図目次

第1図	那珂遺跡群位置図(1/25,000)	2
第2図	那珂遺跡群調査区位置図(1/7,500)	3
第3図	第 177·180 次調査区位置図( 1 /2,000) · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	4
那珂遗	遺跡群第 177 次調査	
第4図	調査区全体図(1/100)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	8
第5図	SB009·068 実測図 (1/80) および SB068 出土遺物実測図 (1/3)	10
第6図	SC040·056 実測図 (1/80) および出土遺物実測図 (1/3) ······	11
第7図	SC033·067 実測図(1/80)および出土遺物実測図(1/3)	12
第8図	SE039 実測図 (1/80) および出土遺物実測図 (1) (1/3)	13
第9図	SE039 出土遺物実測図(2)(1/4、1/6)	14
第10図	SE039 出土遺物実測図(3)(1/4) ······	15
第11図	SE039 出土遺物実測図(4)(1/4) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
第12図	SK025·049·095 実測図(1 /60) ······	
第13図	SR051·052·057 実測図(1 /60)······	17
第14図	ST028·032·042 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/8、1/10)	19
第15図	ST043・061 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/10) ····································	20
第16図	ST062 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3、1/10) ····································	21
第17図	ST063・074・075 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/8、1/10)	22
第18図	ST078・087・100 実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/8、1/10)	23
那珂遣	遺跡群第 180 次調査	
第19図	調査区全体図(1/150)	28
第20図	SD001 実測図および出土遺物(1/3)	30
第21図	SD020 実測図(1/60)および出土遺物(1/3、1/4)	31
第22図	SE007実測図(1/40)および出土遺物(1/3)SK012·015·017·046実測図(1/40、1/60)…	32
第23図	SO008 実測図(1 /60) ······	33
第24図	SO008 出土遺物実測図(1/1、1/3、1/4、1/8)	34
第25図	SR019 実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/1)	35
第26図	SR028 実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/3)	35
第27図	ST004・005 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/10)	37
	ST006 実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/10) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
	ST011・013・014・018 実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/8、1/10)	
第 30 図	ST023・024 実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/10)	41
	ST025・026 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/8、1/10)	
	ST027・030・034 実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/8、1/10)	
第 33 図		
第 34 図	ST044・045 実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/8、1/10)	
	ピット出土遺物実測図(1/3)	
	那珂遺跡群第 177・180 次調査および平板測量図(1/400)	

## 図版目次

#### 那珂遺跡群第 177 次調査

- 図 版1 (1) 第177次全景(上空から) (2) 第177次南側全景(東から)
  - (3) SB068 (西から)
  - (5) SC040 石包丁出土状況(南東から) (6) SE039 遺物出土状況(東から)
- 図 版2 (1) SE039 (東から)
  - (3) SR051 (南から)
  - (5) SR057 (東から)
- 版3 (1) ST028 (東から) 义
  - (3) ST043 (東から)
  - (5) ST087 (西から)
- 出土遺物(1) 図 版 4
- 义 版5 出土遺物(2)
- 図 出土遺物(3) 版 6
- 版7 出土遺物(4)
  - 那珂遺跡群第 180 次調査
- 版8 (1) 第180次全景(上空南から)
  - (2) ST026·034·042 (上空南から)
  - (3) ST006・023・024・030・044 (上空南から)
- 版 9 (1) SD001A 断面(東から) 义
  - (3) SD020 断面(南から)
  - (5) SK012 断面(北西から)
- 义 版10 (1) SO008A 断面(南から)
  - (3) SO041 (北から)
    - (5) SR019 勾玉出土状況 (西から)
- 义 版11 (1) SR019 管玉出土状況 (西から)
  - (3) ST004 (南から)
  - (5) ST006 (南東から)
- 版12 (1) ST011 (南から) 义
  - (3) ST014 (北から)
  - (5) ST023 (北東から)
- 义 版13 (1) ST025 (東から)
  - (3) ST030 (南から)
  - (5) ST042 (東から)
- 义 版 14 出土遺物 (1)
- 版 15 出土遺物 (2) 义
- 版 16 出土遺物 (3) 図
- 义 版 17 出土遺物 (4)
- 図 版 18 出土遺物 (5)

- (4) 竪穴住居出土状況(上空から)
- (2) SK025 (東から)
- (4) SR052 (東から)
- (6) 甕棺墓(上空から)
- (2) ST032 (東から)
- (4) ST062 (北から)
- (6) ST100 (西から)

- (2) SD001B 断面(東から)
- (4) SE007 (東から)
- (6) SO008 (上空南から)
- (2) SO008B 断面(西から)
- (4) SR019 (東から)
- (6) SR019 勾玉出土状況(南西から)
- (2) SR028 (東から)
- (4) ST005 (西から)
- (6) ST006 (北東から)
- (2) ST013 (北から)
- (4) ST018 (東から)
- (6) ST024 (西から)
- (2) ST026 (東から)
- (4) ST034 (南東から)
- (6) ST044 (北から)

# 表目次

那珂遗	遺跡群第 177 次調査	
第1表	SE039 出土木器一覧·····	15
第2表	那珂遺跡群第 177 次調査出土甕棺一覧	24
那珂道	遺跡群第 180 次調査	
第3表	那珂遺跡群第 180 次調査出土甕棺一覧	48
第4表	那珂遺跡群第 177・180 次出土甕棺法量	49

## I. 遺跡の立地と歴史的環境

那珂遺跡群は福岡平野のほぼ中央に位置している。三方を三郡山系や背振山系から延びる山塊に囲まれ、北側に隣接する比恵遺跡群と共に東側は御笠川、西側は那珂川に挟まれた丘陵上に位置する遺跡である。その両河川の間には観音山や牛頸から派生して断続的に長く伸びる洪積台地が形成されている。比恵遺跡群とは浅い谷によって区分されている。那珂遺跡群の立地する丘陵は、かつての沖積作用によって細かい開析谷が複雑に入り込む丘陵である。また、この台地の南側は春日丘陵と連なり、比恵遺跡群、井尻遺跡、五十川遺跡、さらに南には須玖岡本遺跡を中心とした遺跡が広がる。比恵・那珂遺跡群の立地する台地は花崗岩の風化礫層を基盤に、その上に粗砂、細砂、腐食土層、阿蘇山の火砕流による八女粘土層・鳥栖ローム層が形成される。今回報告する那珂遺跡群第177・180次調査では鳥栖ローム層上面から遺構検出を行っている。

比恵・那珂遺跡群において、初めに遺構が確認されるのは弥生時代前期であるが、後期旧石器時代のナイフ型石器や彫器が台地辺縁の比恵第19次、那珂第38・41次調査で検出されている。縄文時代も同様であり、前期の深鉢が比恵第30次調査から出土しているが、散逸的な分布にすぎない。

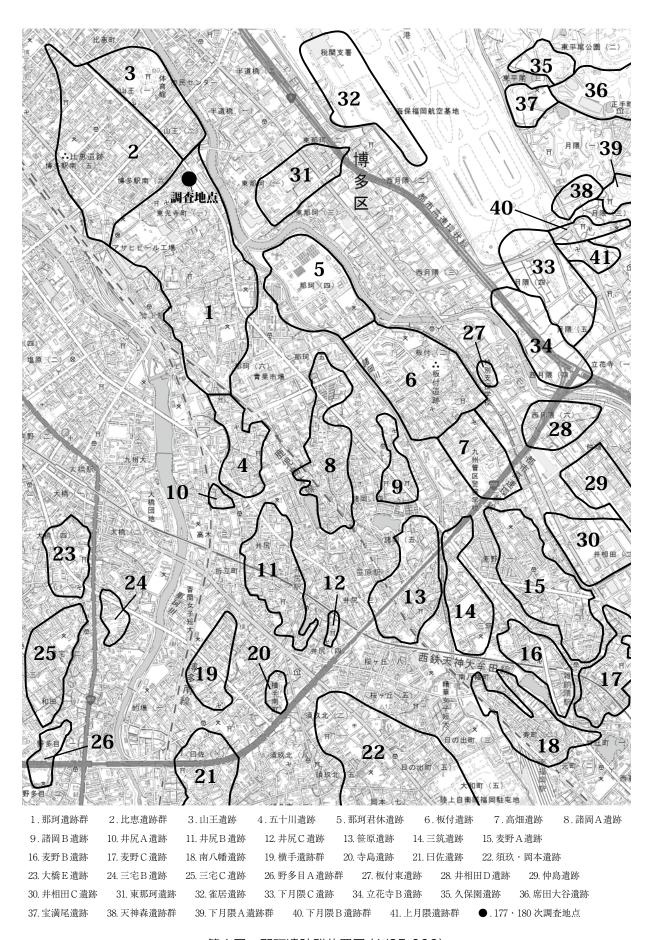
これが弥生時代に入ると一変し、台地の縁辺部で竪穴住居や貯蔵穴といった遺構が拡がりをみせ、 開析谷に面した斜面上には土器・石器・木器などを伴う包含層が形成される。那珂第37次調査では 夜臼期から前期前半の2重環濠が営まれており、これに連続する時期に那珂第67次調査でも環濠と 多数の土坑墓が浩営されている。比恵遺跡群では北西部を中心に、貯蔵穴などが見つかっている。

弥生時代中期に入ると竪穴住居・貯蔵穴等が各地に広がると共にこの頃から甕棺墓の形成も始まる。 中期後半からは竪穴住居や井戸を伴う集落が拡がりを見せる。那珂 67 次調査では弥生中期中頃から後半の多数の甕棺墓が検出されている。また、那珂 153・154 次調査では弥生時代中期末から後期前半になると、2段掘りの大型溝が掘削されており、集落の環濠か、区画溝と推定されている。比恵第 58 次などで検出された南北方向の区画溝が縦断し、その周辺には掘立柱建物が配置され、青銅器生産関連遺物や舶載金属器が多く出土している。那珂第 177・180 次調査では甕棺墓・土坑墓・木棺墓・周溝墓などが多数検出された。

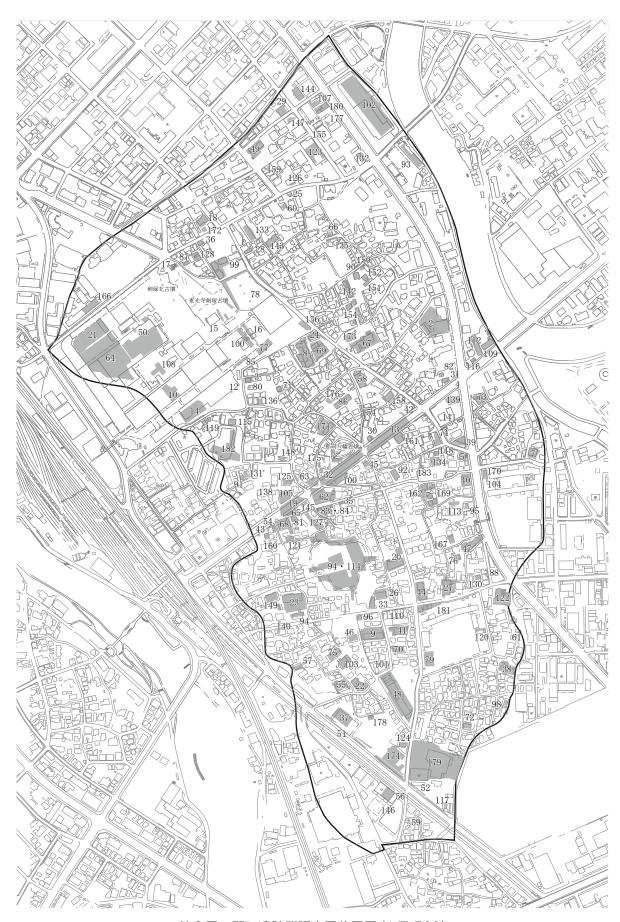
那珂丘陵中央の尾根線上の最高所には、福岡平野では最も古い時期の前方後円墳である那珂八幡古墳が築かれ、主体部には木棺内に三角縁神獣鏡や玉類が副葬されていた。

古墳時代後期には剣塚北古墳の造営を契機として、阿蘇凝灰岩製の石屋形をそなえた横穴式石室を持つ前方後円墳である東光寺剣塚古墳が位置している。このうち、東光寺剣塚古墳は全長 140 m、3 重の周溝をもつ筑前地域最大級の古墳である。また、古墳時代後期後半以降、大型の掘立柱建物や柵列が見つかっており、日本書紀宣化天皇元年(536 年)条にみえる「那津官家」との関連が指摘されている。また、北側に位置する比恵遺跡群についても那珂遺跡群と同様に、少し遅れて掘立柱建物群が確認されている。那珂遺跡群第 19・24 次等ではこのころ出土する初期瓦は、比恵遺跡群では出土せず、掘立柱建物との関連が指摘されており、那珂遺跡群では寺院・官衙遺構が営まれている。

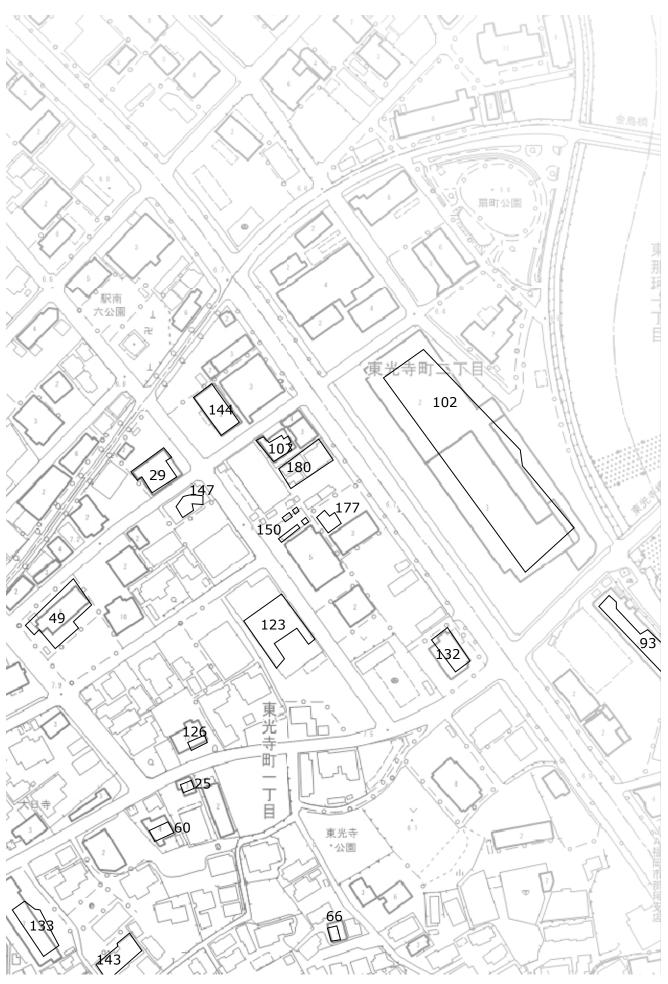
古代以降、比恵遺跡群で確認できる遺構の数は激減しており、集落の中心は那珂遺跡群に移行する。 比恵・那珂遺跡群周辺の遺跡では、板付遺跡があり、日本最古の水田遺跡、弥生時代前期の環濠集 落などがあり、弥生時代前期末の甕棺墓から細形銅剣・銅矛が出土している他、弥生時代後期の竪穴 住居からは小銅鐸が出土し、国指定史跡となっている。さらに南側の井尻遺跡では弥生時代の集落と 甕棺墓が検出され、青銅器生産関連遺構やガラス勾玉鋳型が出土し、工房があったとされている。



第1図 那珂遺跡群位置図(1/25,000)



第2図 那珂遺跡群調査区位置図(1/7,500)



第3図 第177:180次調査区位置図(1/2,000)

那珂遺跡群第177次調査

### Ⅱ. はじめに

#### 1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区東光寺町1丁目19番1、19番2における事務所建設事業に伴う 埋蔵文化財の有無についての照会を令和元(2019)年7月18日付で受理した。

これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれていること、確認調査が実施され現地表面下約50cmで遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、事務所増築事業で遺跡が破壊される部分 について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、令和元年10月3日付で九州自動車リース株式会社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年10月7日から発掘調査を、令和2·3年度に資料整理、報告書作成をおこなうこととなった。

#### 2. 調査の組織

調査委託:九州自動車リース株式会社

調查主体:福岡市教育委員会

(発掘調査:令和元年度・資料整理・報告書作成:令和2・3年度)

調查総括:経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課 課長 菅波正人

同課調查第1係長 吉武 学(元年度)

同課調查第2係長 藏冨士寛

庶 務: 文化財活用課管理調整係 松原加奈枝 (元·2年度)

井手瑞江

内藤 愛

事前審査: 埋蔵文化財課事前審査係長 本田浩二郎 (元・2年度)

田上勇一郎

同課事前審查係主任文化財主事 田上勇一郎 (元・2年度)

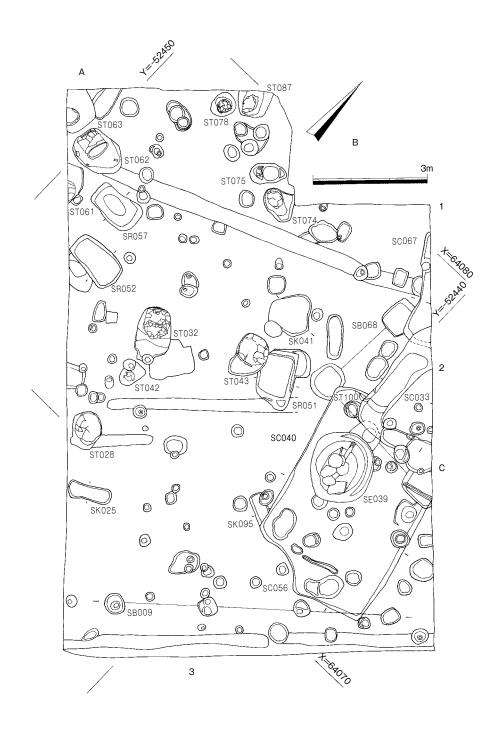
森本幹彦

同課事前審査係文化財主事 朝岡俊也(元年度)

山本晃平(2・3年度)

調查担当: 埋蔵文化財課文化財主事 清金良太

その他、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について九州自動車リース株式会社様を はじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事に終了することが できました。ここに深く感謝致します。



第4図 調査区全体図(1/100)

## Ⅲ. 調査の記録

#### 1. 調査の概要

今回報告する那珂遺跡群第177次調査区は、博多区東光寺町1丁目19番1、19番2に所在し、調査前の現況は標高約7.3 mを測る駐車場であった。調査地点は遺跡の北東側に位置し、隣接する北側では107次、180次、西側では第150次、東側では第102次調査が実施され、更にその周辺でも数多くの調査が進んでいる。

本調査区はアスファルトおよび客土のほぼ直下、標高 6.6 m前後で遺構面である鳥栖ローム層が広がり、遺構面は全体的にフラットである。遺構面に切り込むように、宅地化以前の耕作地の造成に伴うものと推測される溝が東西に走る。遺構が当初の想定以上に検出されたため、排土の置き場がなく、調査区内の一部を図面、写真撮影を終えたのち、排土置き場として利用した。

遺構検出は遺構面上面までを重機で剥ぎ取って実施したが、以下は人力によって作業を行った。今回の調査では、弥生時代中期以降の掘立柱建物や竪穴住居、土坑墓、甕棺墓等を主体として確認できたが、古代のピットや中世の井戸も散見する。出土遺物量は、コンテナケースにして23箱である。

発掘調査は令和元年(2019)年10月7日に着手した。まず、発掘機材やリース機材を搬入し、翌日に重機による表土剥ぎ取りから開始した。その後10月9日から、壁面清掃、遺構面保護、世界測地系によるトラバース杭の設定等を実施し、遺構検出を開始した。順次、南側から検出遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化、遺物取り上げ、周辺測量等の作業を進め、排土置き場の関係から11月6日に南側の一部全体写真の撮影を行い、排土置き場とした。その後、甕棺掘削、図化や個別遺構写真撮影を行い、11月13日に高所作業車を使用して全体写真撮影を行った。残る甕棺の図化作業、取り上げ、片付け、重機による埋め戻し等を終え、11月20日に第177次調査を完了した。

なお、調査対象面積は、141.8㎡であったが、既存建物から距離を取ったため、今回実際に作業を行った面積は131.7㎡であった。調査時の遺構番号は、001から3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述するが、掘立柱建物を構成する柱穴や竪穴住居内の施設については、報告の便宜上必要に応じて遺構毎にP1から順に番号を付した。

#### 2. 遺構と遺物

以下、遺構種別ごとに報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における世界測地系による 10 m単位の平面座標を基準とした英字(西から東に $A \sim C$ )と数字(北から南に $1 \sim 3$ )の組み合わせによるグリッド表記を用いる(第4図参照)。

#### 1) 掘立柱建物 (SB)

以下、調査区の南、東側で確認した掘立柱建物2棟について報告する。

SB009 (第5図) 調査区南のBC-2・3区に位置する4間の建物である。対応する柱穴は調査区外に伸びる。柱間は約2.4 mを測る。柱穴はP2が一辺0.45 mの隅丸長方形であるが、他は径約0.5 mの円形を呈し、深さ $0.3 \sim 0.4$  mを測る。須恵器片が出土したが、小片で実測できなかった。

SB068 (第5図) 調査区のBC -2区で確認した。建物方位はほぼ座標北か、座標北に直行する。また、 $P1\sim P4$ はそれぞれ竪穴住居に切られる。柱間は  $1.8\sim 2.6$  mで、柱穴は隅丸長方形を呈する。規模は一辺約  $0.7\sim 1.0$  mを測る。P3、4 はほぼ全て竪穴住居に切られるが、他は深さ約  $0.7\sim 0.8$  mを測る。埋土は黒褐色土に少々ロームが混じっていた。

出土遺物(第5図) 1はP1出土の甕で口縁部のみが残る。器面は風化が著しい。弥生時代後期初頭に位置づけられる。

#### 2) 竪穴住居 (SC)

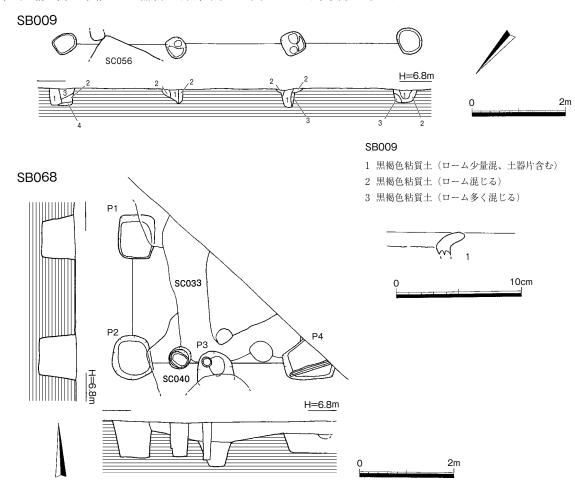
調査区の東側において竪穴住居4軒を確認することができた。4軒全て切合っており、調査区外に伸びる竪穴住居が多い。また、近い時期に建て替えられたようである。

SCO40 (第6図) BC-2区で検出した。SC056を切り、SC033に切られる。南北の長さは約4.7m、東西の長さは約3.6mを測り南北方向にやや長い長方形プランを呈する。コーナーは隅丸にカーブし、壁面の高さは0.2m程度で、土層観察では2層が貼床である。床面では南側に窪み状の壁溝が確認できる。主柱穴は4本確認できた。古墳時代前期初頭。

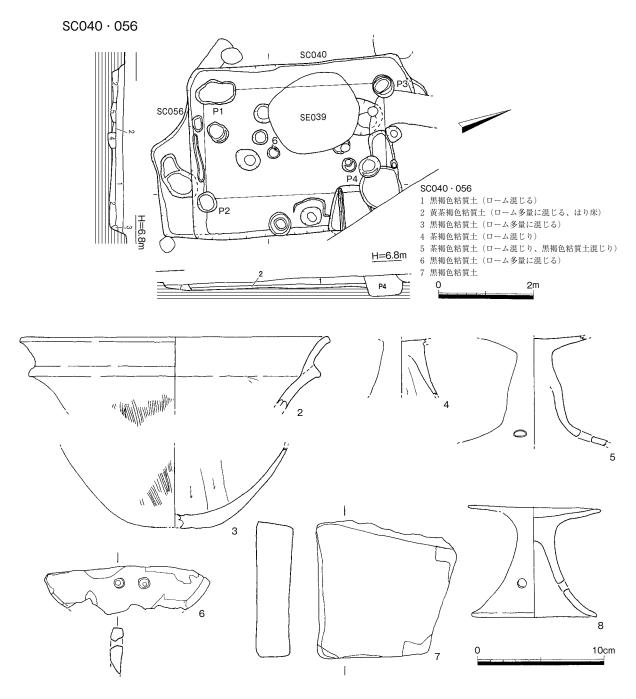
出土遺物(第6図)  $2\sim5$  は土師器である。2 は豊前系の壺である。他の遺物と比較すると色調が暗い。口径約 24.2cmである。3 は甕もしくは壺の底部である。4 は高坏の脚部。5 は器台である脚部下に穿孔が5 か所確認できる。6 は頁岩製の石包丁で厚さ1.0cm、幅12.9cmである。7 は泥岩の砥石で、厚さ $2.5\sim2.9$ cmである。

SC056 (第6図) C-2 区で検出した。SC040 に切られており、一部分しか残っていなかった。西側の壁は直角ではなく斜めに走っており、住居ではない可能性も否定できないが、SC040 の東壁には SC056 の壁溝の残存と考えられる部分が確認できる。復元の規模は南北  $3.8\,\mathrm{m}$ 、東西  $1.9\,\mathrm{m}$ 、壁面の高さは  $0.1\,\mathrm{m}$ である。

出土遺物(第6図) 8は器台で脚部中位に穿孔が3か所確認できる。



第5図 SB009·068 実測図 (1/80) および SB068 出土遺物 (1/3)



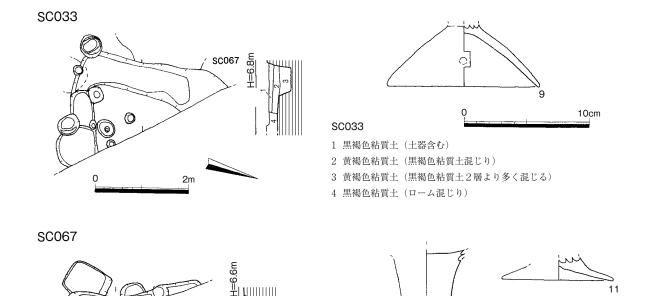
第6図 SC040·056 実測図 (1/80) および出土遺物実測図 (1/3)

SC033 (第7図) BC – 2区で検出した。SC040、067を切る。今回の調査では、一番新しい竪穴住居であるが、規模は大部分が調査区外に伸びるため不明である。壁溝が幅  $0.6~\mathrm{m}$ 、深さ  $0.47~\mathrm{m}$ と大きく深い。壁面の高さは約  $20\mathrm{cm}$ である。

出土遺物(第7図)9は土師器で精製土器の器台である。破片であるが、1か所穿孔が確認でき、 底径約12.0cm。

SC067 (第7図) BC -  $1\cdot 2$  区で検出した。SC033 に切られる。西側の一辺は約 2.9 m、深さ 0.42 mである。SC033 のように、壁溝が大きく深いタイプの可能性がある。

出土遺物 (第7図) 10、11 は土師器である。10 は高坏で脚部のみが残る。11 は精製土器、鉢の脚



第7図 SC033·067 実測図 (1/80) および出土遺物実測図 (1/3)

2 黄褐色粘質土 (黒褐色粘質土混じり)

10

黒褐色粘質土

10cm

部である。底径 8.8cmを測る。

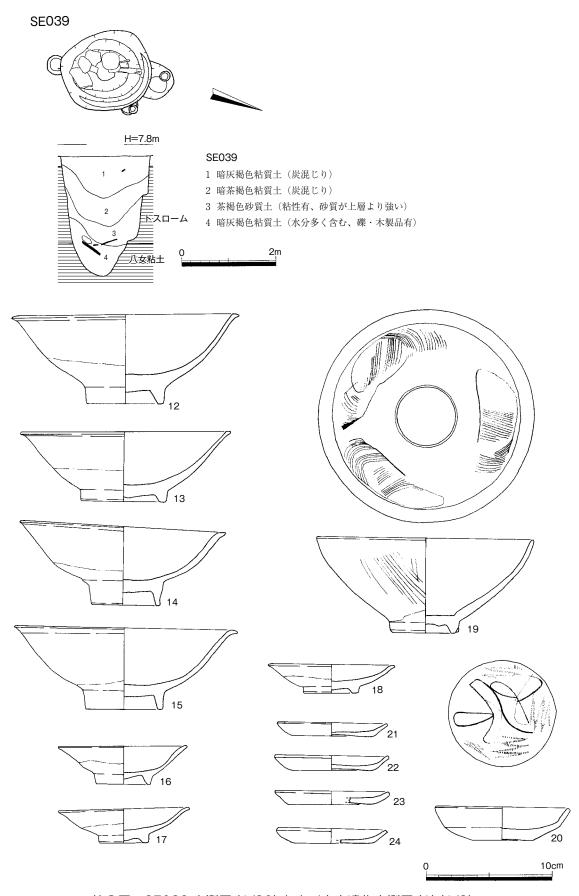
#### 3) 井戸 (SE)

SC033

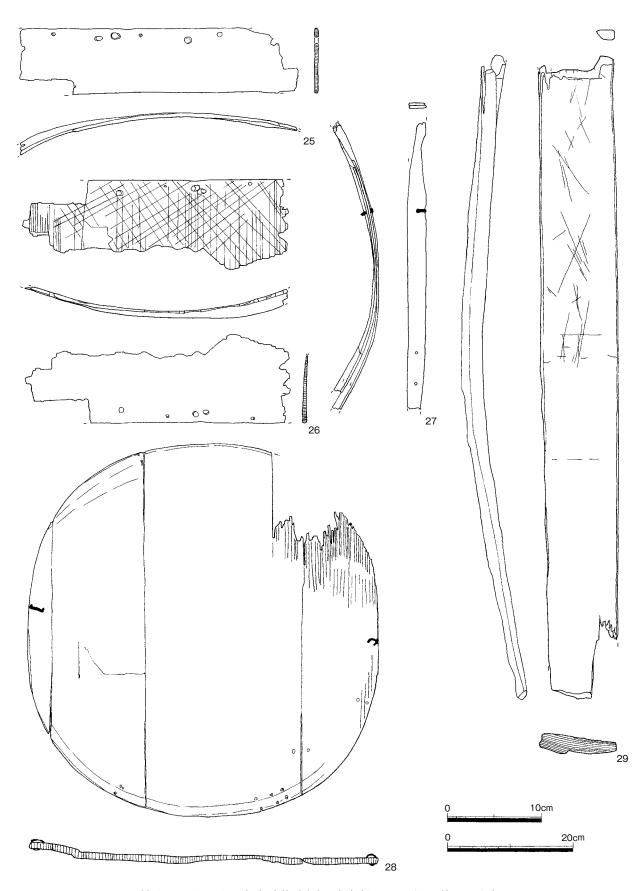
SC040 を切るように中世(12世紀後半)の井戸が1基検出された。周囲に埋土が同じピットがあり中世の集落が広がっていた可能性がある。

SE039 (第8図) BC - 2区で検出した。径は  $1.92\,\mathrm{m}$ 、深さ  $2.54\,\mathrm{m}$ の井戸である。井戸の底から 湧水した。SB068、SC040 を切る。上部の 1 層は近代の陶磁器片と共に須恵器片が混じっていた。 2 層はほぼ何も確認されず、  $3\cdot 4$  層から 12 世紀中頃から後半の磁器が木器と共に確認された。断面 図を見ると  $2\cdot 3$  層で階段状になっており、掘削当時の痕跡ではないかと考えられる。

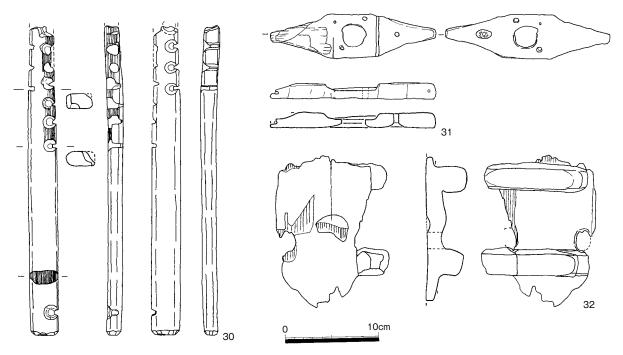
出土遺物(第8、9、10、11 図)12~15 は白磁の碗である。16~18 は白磁の皿である。碗・皿共に、いずれも内面から外面上部にかけて施釉し、外面下部から底部にかけては露体である。13、16 は内面に施釉後に剥ぎ取られており、重ね焼きの痕跡が確認できる。19、20 は同安窯系の青磁である。19 は碗で口径 17.1cm、底径 5.2cm、高さ 7.4cmである。内面と底部付近を除いて施釉されている。内外面共に箆により文様を施す。20 は皿である。高台は無く、底部以外を施釉する。文様は内面にみられ、箆による文様と櫛点描文を施す。21~24 は土師器の坏である。25~41 は木器である。他にも出土したが、紙幅の関係で掲載していない。25~28 は曲物である。25~41 は木器である。他にも出土したが、紙幅の関係で掲載していない。25~28 は曲物である。27 は 28 の上で検出された。厚さ 0.3cmほどの薄い板を 2 枚重ねて貼り合わせている。また他の部材と結合するための穴が 3 か所ありそのうち 1 か所には樹皮が残っていた。28 は曲物の底部である。厚さ 0.7cm、幅 36.8cmである。側板を乗せたと考えられる痕跡がある。また、他の部材と結合するための穴が 6 か所(7 か所か)確認でき、そのうち 3 か所には樹皮が残る。29 は井戸枠に使用したものであろうか。厚さ 3.7cmの板材で一方にはホブが確認できる。30 は火鑽臼である。残存長 32.7cm、幅 3.1cm、厚さ 1.8cmである。表に 8 か所、裏に 3 か所の穴が確認でき、端部は丁寧に面取りする。31 は糸巻部材である。穿孔も



第8図 SE039 実測図 (1/80) および出土遺物実測図 (1) (1/3)



第9図 SE039 出土遺物実測図(2)(29 は 1/6、他は 1/4)

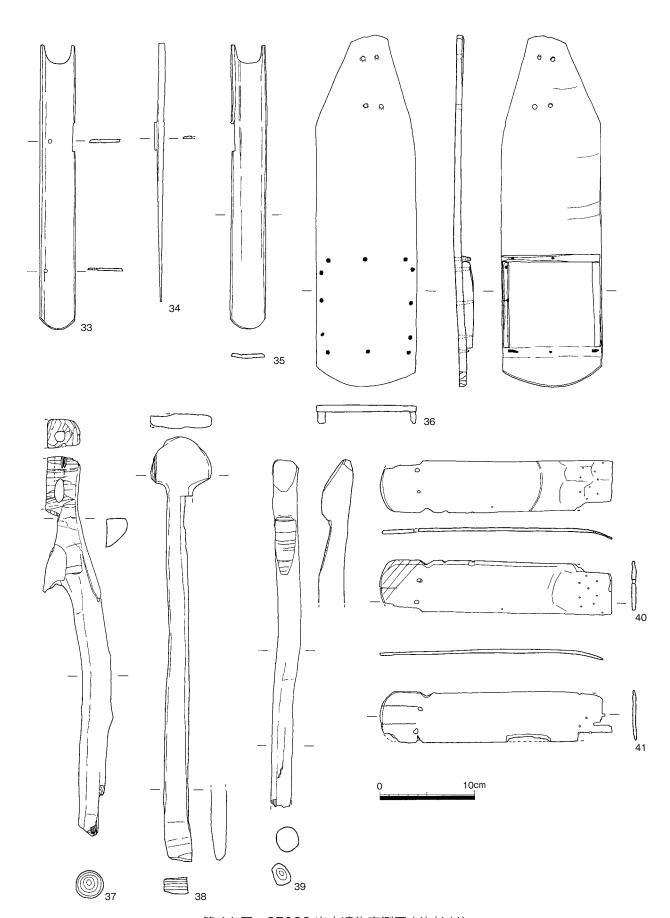


第 10 図 SE039 出土遺物実測図(3)(1/4)

確認できる。中心の大きい穴は径約 2.5cm。その他小さい穿孔が6か所認められる。32 は下駄である。 鼻緒を通す孔が2か所に確認できる。 $33 \sim 39$  は用途不明木器である。 $33 \sim 35$  は一連の木器で 33 と 35 は凸凹が組み合わさって出土した。36 は木釘を 12 本使用し他の板材と組合せている。また4か所に穿孔が確認できる。37、39 は芯持材を使用する。40、41 は板材の一部を抉り、短辺の片方は丸く、もう一方は直線的で、全体よりもさらに薄く仕上げる。

番号	名称	規模(cm)	木材組織	その他
25	曲物(側板)			穿孔7ヶ所
26	曲物(側板)			穿孔5ヶ所、内面に格子状の線
27	曲物			穿孔3ヶ所、1ヶ所樹皮が残る
28	曲物(底板)	39.2×36.8×0.7	柾目材	穿孔6ヶ所(7ヶ所か)、5ヶ所に樹皮残る
29	板状木材(井戸材か)	(102.7)×12.8×3.2	板目材	大きく反る、端部にホゾ
30	火鑽臼	32.7×3.1×1.8	柾目材	穴は表8ヶ所、裏3ヶ所
31	糸巻	17.4×4.9×1.6	柾目材	穿孔7ヶ所(2ヵ所貫通せず)
32	下駄		柾目材?	径 1.6 ~ 2.0㎝の穿孔2ヶ所(3ヶ所か)
33	不明木器 (板材)	29.9×3.7×0.3		穿孔 2 ヶ所
34	不明木器 (板材)	$(27.1) \times (1.1) \times 0.3$		33、35 と凹凸の関係
35	不明木器 (板材)	29.9×3.7×0.5		穿孔は確認できない
36	不明木器	36.8×10.5×0.8	板目材	12 本の木釘で結合、4 ヶ所穿孔
37	不明木器	39.5×2.8	芯持ち材	上部に径 1.1㎝の穿孔、もう 1 ヶ所穿孔されていたか。
38	不明木器	44.5×6.4×1.8	柾目材	下部に削り痕
39	不明木器	36.5×2.7	芯持ち材	全体的に丁寧な削り、上部は焼けた痕跡か。
40	不明木器	24.5×5.6×0.4		穿孔2ヶ所、もう片方の端を薄く削り、穿孔9ヶ所
41	不明木器	24.4×5.2×0.3		穿孔2ヶ所、もう片方の端を薄く削り、穿孔4ヶ所?

第1表 SE039 出土木器一覧



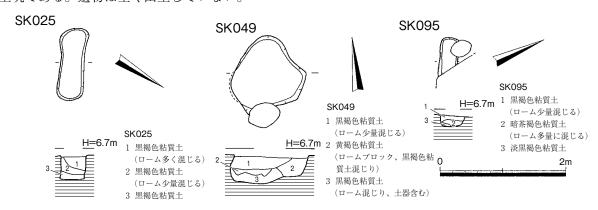
第 11 図 SE039 出土遺物実測図(4)(1/4)

#### 4) 土坑 (SK)

SK025(第12図)B -3 区で検出した。長辺1.15 m、短辺0.37 mの隅丸長方形プランで、深さ0.39 mを測る。出土遺物は破片ばかりで図化できなかった。時期は不明である。区域・形状から土坑墓の可能性もある。

SKO49 (第12図) B – 2区で検出した。西側は一部オーバーハングしている不整形な土坑である。深さ 0.46~m を測る。貯蔵穴の可能性もある。出土遺物が少なく破片ばかりで図化していない。時期は不明である。

SK095 (第 12 図) B C -2 区で検出した。一部を SC040 に切られる。幅 0.37 m、深さ 0.17 mの 土坑である。遺物は全く出土していない。



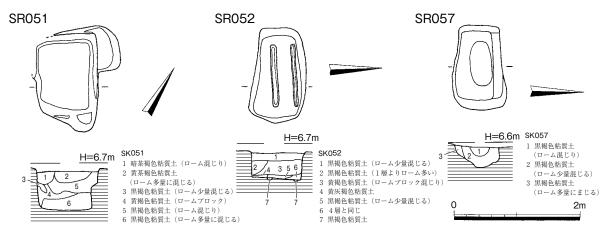
第12図 SK025·049·095 実測図(1/60)

#### 5) 土坑墓 (SR)

SR051 (第13図) B – 2区で検出した。ST043 が一部を切っているようにみえるが、潰れて上に覆いかぶさっただけで、SR051 の方が新しい。長さ約 $1.3 \,\mathrm{m}$ 、幅 $0.98 \,\mathrm{m}$ 、深さ $0.66 \,\mathrm{m}$ を測る。土器は弥生土器片が出土したが、詳しい時期は不明である。

SR052 (第13図) B -2 区で検出した。長さ 1.47 m、幅 0.83 m、深さ 0.46 mを測る。中心からずれた位置に長軸方向に 2 本溝がみられる。木棺の可能性がある。短軸方向には溝が確認できない。主軸は東西方向である。弥生土器片が数点出土したが、詳しい時期は不明である。

SR057 (第 13 図) B – 2 区で検出した。長さ 1.33 m、幅 0.76 m、深さ  $0.24 \sim 0.32$  mを測る。土器は出土していない。また SR051 とは主軸の方向を同じ東西方向にする。



第 13 図 SR051 · 052 · 057 実測図 (1/60)

#### 6) 甕棺墓 (ST)

削平により依存状況は良好ではないが、弥生時代中期後半から後期前半の甕棺が12基出土した。 後世の破壊により合口か単棺の判別ができない甕棺もみられる。

ST028 (第 14 図) B - 2・3 区で検出した。成人用甕棺である。墓壙竪坑および甕棺が削平されており、削平により上甕の存在は不明である。一部撹乱されているが、墓壙は不整形な隅丸方形を呈し長さ  $0.98~\mathrm{m}$ 、幅  $0.78~\mathrm{m}$ が残る。主軸方位はN -  $140^\circ$  - E、埋置角度は約  $27^\circ$ を測る。K III b 期の甕棺である。

出土遺物 (第 14 図 42) 42 は甕で口縁部を欠く。底径 12.8cm、残存器高約 75.0cmを測る。口縁部は削平により欠損する。胴部に 2条の突帯を巡らす。調整は内外面共にナデ調整、色調は淡黄褐色である。外面に大きな黒斑が確認できる。

ST032(第 14 図) B -2 区で検出した。棺の組み合わせは、上棺が鉢、下棺が甕の組み合わせとなる成人用の合口式甕棺である。粘土等目張りは確認できなかった。墓壙竪抗上部が削平されているが階段状になっており、斜坑は全て残る。上甕・下甕ともに斜坑内に収まる。墓壙は南側の一部が飛び出るが隅丸長方形を呈し、長さ 1.53 m、幅 0.91 mが残る。主軸方位は $N-36^{\circ}-W$ 、埋置角度は  $33^{\circ}$  を測る。K III b 期の甕棺であろう。

出土遺物(第 14 図 43、44)43 は上甕に使用された鉢である。口径 59.8cm、底径 10.2cm、高さ 32.4cmを測り、口縁部は「T」字状の口縁を有する。胴部は内弯する。調整は内外面共にナデ調整、色調は橙褐色である。底部付近に黒斑が確認できる。44 は大型の甕で口径 58.2cm、底径 11.8cm、高さ 92.4cmを測る。口縁部は「T」字状の口縁を有し、頸部に 1 条の三角突帯、胴部中央やや下寄りに 2 条の突帯をめぐらす。甕の下半部にやや膨らみを感じる。調整は剥離して不明である。色調は淡橙 褐色で、胴部に黒斑が確認できる。上甕・下甕共に一部削平を受けている。

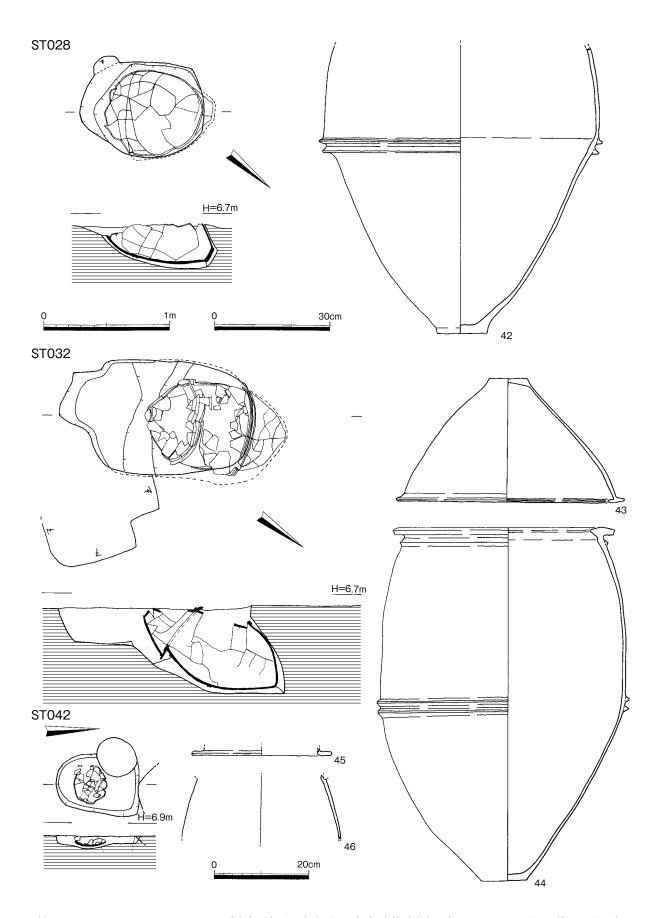
STO42(第14図) B-2区で検出した。上棺、下棺ともに甕の小児棺である。墓壙上部が削平されており、上甕の口縁部と下甕の頸部から胴部だけが残る。墓壙は長さ0.677 m、幅0.46 m、深さ0.1 mが残る。主軸方位、埋置角度は不明である。

出土遺物 (第 14 図 45、46) 45 は上甕の口縁部である。口縁部のみが残り、口径約 29.6cmであった。色調は橙褐色である。46 は下甕の胴部上半である。残存器高 13.4cm、色調は表が淡橙褐色、裏が暗灰褐色である。45、46 は同一個体の可能性も考えられたが、接合せず、厚さ、色調も違うので上下の甕であると判断した。

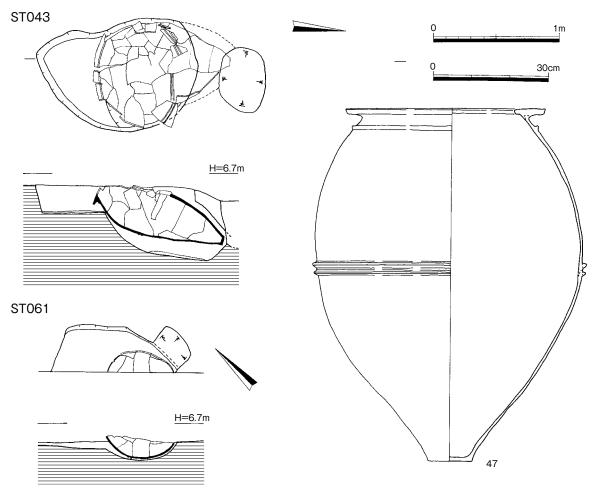
ST043 (第 15 図) B -2 区で検出した、単棺の甕棺である。墓壙上面が削平されており、甕が潰れているが墓壙の断面は階段状になる。甕棺を収めた斜坑はほぼ全てが残り、口縁部が斜坑より飛び出し斜坑の縁にひっかけているように観察された。墓壙は不整形で長さ 1.25 m、最大幅 0.88 mを測る。主軸方位はN -5° - W、埋置角度は 15° を測る。K  $\square$  c 期の甕棺であろう。

出土遺物 (第15図47) 口縁部の大部分が欠け、土圧で押し潰された形で出土した。口径約52.2cm、底径11.4cm、高さ91.8cmの大型の甕である。倒卵型の胴部に、「T」字状の口縁部が付く。頸部に断面三角の突帯が1条、胴部中央に2条の三角突帯を巡らす。調整はナデ調整で、突帯部は横ナデを施す。胎土に1~3mmの砂粒を含み、色調は橙褐色、胴部に黒斑が確認できる。

ST061 (第15 図) B - 2 区で検出した。調査区の端での検出となり、アスファルト・敷地境界の柵と重なり全体を取り出せなかった。墓壙の北西側は撹乱を受けるが、全体的に深さが浅く、残りが悪い。甕棺は胴部中位ほどに突帯を2条巡らす。柵に刺さっており甕棺はほとんど取り出せなかった。成人棺であろう。



第 14 図 ST028・032・042 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (45・46 は 1/8、他は 1/10)

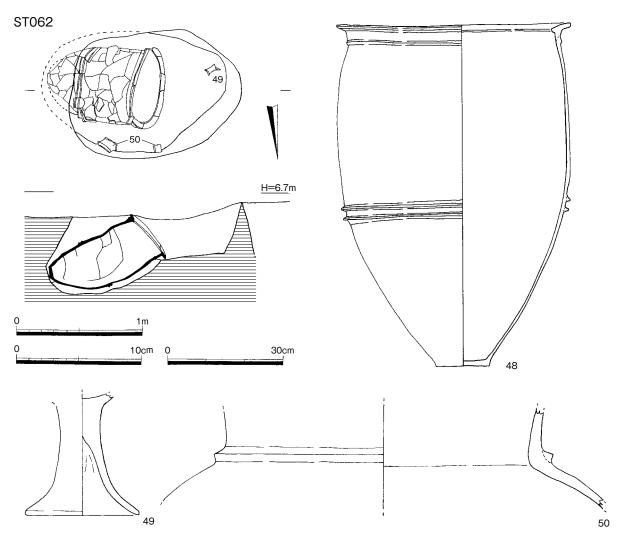


第 15 図 ST043・061 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/10)

ST062 (第 16 図) AB-2 区で検出した、単棺の甕棺である。墓壙は削平されているが、甕棺はほぼ完形に復元できた。甕の上に木蓋が乗っていたと考えられる。墓壙は不整形な方形で、長さ 1.34 m、幅 0.98 mを測り、墓壙は階段状に掘削されている。ST062 も ST043 と同じく甕棺の口縁部が斜坑より飛び出し斜坑の縁にひっかけているように観察された。主軸方位は $N-85^\circ-W$ 、埋置角度は約  $18^\circ$ である。全体的に土圧で歪んで検出された。 $K \coprod c$  期の甕棺である。また、墓壙内から高坏、壺が検出されている。

出土遺物 (第 16 図 48 ~ 50) 単棺がほぼ完形に復元できる形で出土した。48 は口径 62.0cm、底径 13.8cm、高さ 89.0cmの大型の甕である。胴部最大径は 60.8cmで、位置は胴部の上よりである。頸部に断面三角の突帯を 1 条、胴部中央下寄りに 2 条の突帯を巡らせる。器面調整はナデ調整で、突帯部分は横ナデを施す。胎土に  $1 \sim 3$  mmの砂粒を含み、色調は橙褐色である。49、50 は弥生土器である。49 は高坏の脚部で底径約 9.0cm、50 は壺の頸部である。

ST063(第 17 図) A-1 区で検出した。ST063 も ST061 と同じく調査区外に伸びアスファルト・柵によって調査が阻まれた。墓壙の全体像は分からないが深さ  $1.42\,\mathrm{m}$  と深く違う遺構(甕棺墓か?)の可能性もある。時間が無く一度に掘削してしまったが、断面図を見ると  $1\sim3$  層、 4 層で違う遺構になっていると考えられる。なお、 4 層からは遺物は出土していない。主軸方向、埋置角度は不明である。甕棺はできる限り取り出した。上甕の時期は  $K \coprod a$  期である。下甕はできるかぎり取り出したがバラバラで底部のみが復元できた。



第 16 図 ST062 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (48 は 1/10、他は 1/3)

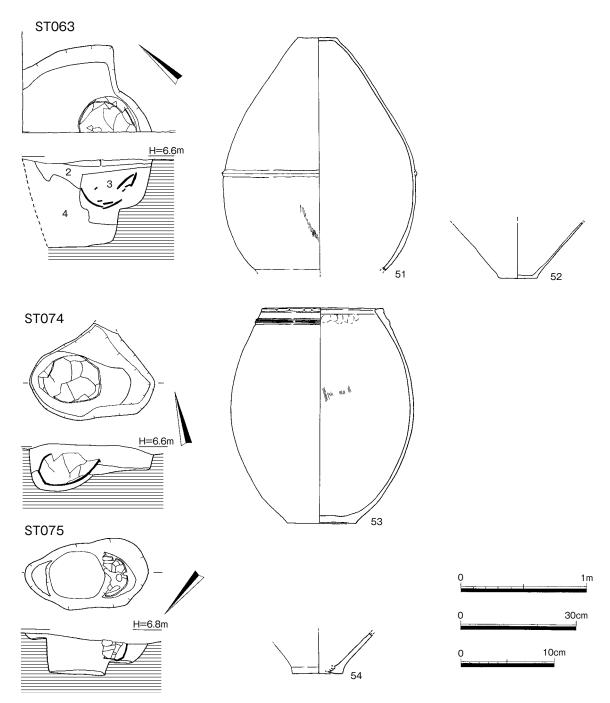
出土遺物 (第 17 図 51、52) 51 は小児棺の上甕である。口縁部を除いて復元できた。底径 10.6 cm、高さ約 60.8cmが残る。胴部中位に 1 条の三角突帯が巡る。一部にハケ目が確認できる。胎土に 1 ~ 3 mmの砂粒を含み、色調は暗黄褐色から橙褐色で一部に黒斑が確認できる。52 は下甕で破片が多く、実測できたのは底部の一部のみであった。

ST074 (第 17 図) B - 2 区で検出した、丹塗りの小児棺である。墓壙は不整形で長さ 0.98~m、幅は最大で 0.76~mを測る。また、墓壙は一段掘に掘削されている。主軸方位はN -  $77^\circ$  - W、埋置角度は  $29^\circ$ である。時期は K~IV~a~期であろうか。

出土遺物 (第 17 図 53) 口縁から頸部の一部を除きほぼ完形に復元できた。口径約 26.6cm、底径 14.3cm、高さ 45.2cmを測る。器形としては寸動である。口縁部は打欠き、その下に断面M字状の突帯が巡る。外面、内面上部まで丹で塗られており、内面口縁部は指押さえ、一部にハケ目が確認できる。 焼成は良好で、胎土には径 4 mm以下の砂粒を含む。色調は橙褐色である。

ST075 (第 17 図) B - 2 区で検出した。墓壙は大きく削平を受けており、長さ 0.98~m、幅 0.52~mの不整形を呈する。深さは中心部が最も深くなっており、別の遺構があった可能性も考えられるが、遺構検出の際にはわからなかった。主軸方位は $N-50^\circ-E$ 、埋置角度  $70^\circ$ である。

出土遺物(第17図54)底部のみ出土した。胴部から口縁部は無く、別の遺構の可能性を伺わせる。



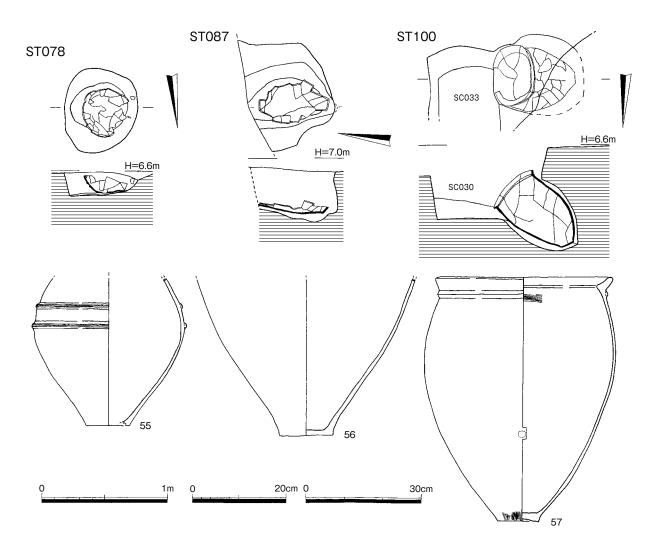
第 17 図 ST063·074·075 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (53·54 は 1/8、51·52 は 1/10)

54 は小児棺の底部である。底径 10.4cmが残る。調整は摩滅しており不明である。胎土には径 3 mm以下の砂粒を含む。色調は橙褐色である。

ST078 (第 18 図) B - 2 区で検出した。墓壙は大きく削平を受けており、 $0.59 \sim 0.87$  mの円形である。主軸方位はN - 88° - E、埋置角度は 17°である。

出土遺物 (第 18 図 55) 55 は小児棺である。壺の頸部から口縁部を欠く。底径は約 9.0cmである。 胴部上位から中位にかけ断面M字の突帯を 2条めぐらす。調整は摩滅しており不明である。焼成は良 好で、色調は淡橙褐色である。また、胎土に径 1~4 mmの砂粒を含む。

ST087 (第18図) B-1・2区で検出した。掘削当初は近代の土が墓壙の中に入っており、撹乱



第 18 図 ST078・087・100 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (100 は 1/10、他は 1/8)

と考え掘進めていたが、底近くで黒褐色粘質土に変わりその中から甕棺が出土した。撹乱により破壊されていたため墓壙はもう少し小さかったと考えられる。主軸方位は $N-10^\circ-W$ 、埋置角度は  $35^\circ$ である。

出土遺物 (第 18 図 56) 56 は小児棺である。成人棺とするには小さい。ST087 の全体図ではもう少し接合できそうだが、撹乱を受けていたためか胴部中央より上がボロボロであった。底径 11.0cmを測る。焼成は良好で、色調は橙褐色である。胎土には径 5 mm程の砂粒を含む。

ST100 (第 18 図) SC033、040 に墓壙の一部を切られて出土した。SC033 の掘削途中でみつかり、掘りすぎたきらいがある。墓壙はおそらく楕円形の形をしていたと考えられる。ST100 も甕棺の口縁部が斜坑より飛び出しているように観察された。

出土遺物(第 18 図 57)57 は小児棺でほぼ完形に接合された。上甕があったかどうかは SC033 に 切られている関係で不明である。口径 45.4cm、底径 10.8cm、高さ 65.6cmであった。内面頸部と外面底部にハケ目調整が確認できる。また胴部中央下に円形の穴が確認できた。この穴は甕棺を斜坑に入れたときに下向きになるように設けられていた。焼成は良好、色調は橙褐色、胎土には径 2mmの砂粒が確認された。K IV a 期の甕棺である。

#### 5. 小結

今回の調査では掘立柱建物 (SB) 2棟、竪穴住居 (SC) 4棟、井戸 (SE) 1基、土坑 (SK) 3基、土坑墓 (SR) 3基、甕棺墓 (ST) 12基を検出した。

SB009 は須恵器の小片が出土している。SB068 は大型の掘立柱建物で現状では2間×3間である。 弥生時代後期初頭に位置づけられる。

竪穴住居(SC)は4棟検出された。古墳時代前期初頭の短期間のうちに建て替えられたようである。順番としては $SC056 \rightarrow SC040 \cdot SC067 \rightarrow SC033$ である。

SE039 は12世紀後半の井戸である。白磁・同安窯系青磁・土師器のほか、木製品が多数出土した。12世紀後半の時期に収まる遺構はこの井戸だけであったが、周囲に同時代の遺構がある可能性は否定できない。

SR051 は土器が小片だったために詳しい時期は分からないが、ST043 との切合いから少なくとも 弥生時代中期後半よりも新しい。SR052・057 と共に弥生時代の後半と考えている。

甕棺墓(ST)は 12 基検出された。 2 基は隣地との境界に位置しており、図面など不完全である。 12 基のうち、成人棺は 5 基検出された。 5 基中、上甕があったかわからない甕棺が 2 基あるが、確実に上甕があったのが 1 基だけであった。残りがいい成人棺 3 基(ST032・043・062)は弥生時代中期後半(K III b・K III c)に位置している。成人棺で残りがいい 3 基を見比べると ST032 は上甕まで斜坑の中に納まるのに対し、上甕の無い ST043・062 を見ると斜坑は頸部付近までで、口縁部を縁にかけるように出土した。時期で見ると ST032 は K III b、 ST043・062 は K III c に位置しており、 ST043・062 の方が弥生時代中期後半でも新しい。また ST032 と違い ST043・062 は単棺である。時期的な違いによるものか、合甕と単棺による違いか個体数が少なく、まだはっきりしていない。

墓域と生活域にも小さい面積であったが違いがみられた。墓域は西側、生活域は東側を占地していた。時期も墓域(甕棺墓)が弥生時代中期後半から後期前半の早い段階まで。生活域が弥生時代後期初頭に掘立柱建物が建てられて以降、竪穴住居の段階まで存在していた。ST100をSC033が切っており、SB069が一部ST100よりも東側に建つが概ね墓域と生活域は分かれていたように考えている。

遺構番号(上甕、下甕)	成人棺 / 小児棺	規模(底径・口径・高さ)	胎土	主軸方位	埋置角度	時期	墓壙
ST028	成人棺	12.8cm $\cdot - \cdot -$	淡黄褐色	N -140° -E	27°	K III b	-
ST032 (上甕)	成人棺(鉢)	10.2cm · 59.8cm · 32.4cm	淡橙褐色	N -36° -W	33°	V III b	類
ST032 (下甕)	成人棺	11.8cm · 58.2cm · 92.4cm	淡橙褐色	1 IN -30 -W	33	KIIIb	I <del>類</del>
ST042 (上甕)	小児棺	- · 29.6am · −	橙褐色				
ST042 (下甕)	小児棺	- · - · -	淡橙褐色	_	_		_
ST043	成人棺	11.4cm · 52.2cm · 91.8cm	淡橙褐色	N-5° -W	15°	KIIIc	l 類
ST061	成人棺	- · - · -	淡黄褐色	_	_	_	_
ST062	成人棺	13.8cm · 62.0cm · 89.0cm	淡橙褐色	N-85° -W	18°	KIIIc	l 類
ST063 (上甕)	成人棺	10.6cm·-·-	橙褐色			_	
ST063 (下甕)	成人棺	10.2cm·-·-	橙褐色	_	_	K III a	_
ST074	小児棺	14.3cm · 26.6cm · 45.2cm	橙褐色	N -82° -E	29°	K IV a?	l 類
ST075	小児棺	10.4cm · - · -	橙褐色	N-50° -E	70°	_	_
ST078	小児棺	$9.0$ cm $\cdot - \cdot -$	淡橙褐色	N-88° -E	17°	_	_
ST087	小児棺	11cm · — · —	橙褐色	N -11° -W	35.°	_	_
ST100	小児棺	10.8cm · 45.4cm · 65.6cm	橙褐色	N-85° -E	96°	KIVa	Ⅱ類

第2表 那珂遺跡群第177次調査出土甕棺一覧

那珂遺跡群第 180 次調査

### W. はじめに

#### 1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区東光寺町1丁目14、17番における共同住宅建設事業に伴う埋蔵 文化財の有無についての照会を令和元(2019)年10月8日付で受理した。

これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれていること、確認調査が実施され現地表面下約50cmで遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、共同住宅建設事業で遺跡が破壊される部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、令和2年3月19日付で個人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務 委託契約を締結し、同年4月8日から発掘調査を、令和3年度に資料整理、報告書作成をおこなうこ ととなった。

#### 2. 調査の組織

調査委託:個人

調査主体:福岡市教育委員会

(発掘調査:令和2年度・資料整理・報告書作成:令和3年度)

調查総括:経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課 課長 菅波正人

同課調查第2係長 藏富士寛

庶務: 文化財活用課管理調整係 松原加奈枝(2年度)

井手瑞江

内藤 愛

事前審查: 埋蔵文化財課事前審査係長 本田浩二郎 (2年度)

田上勇一郎

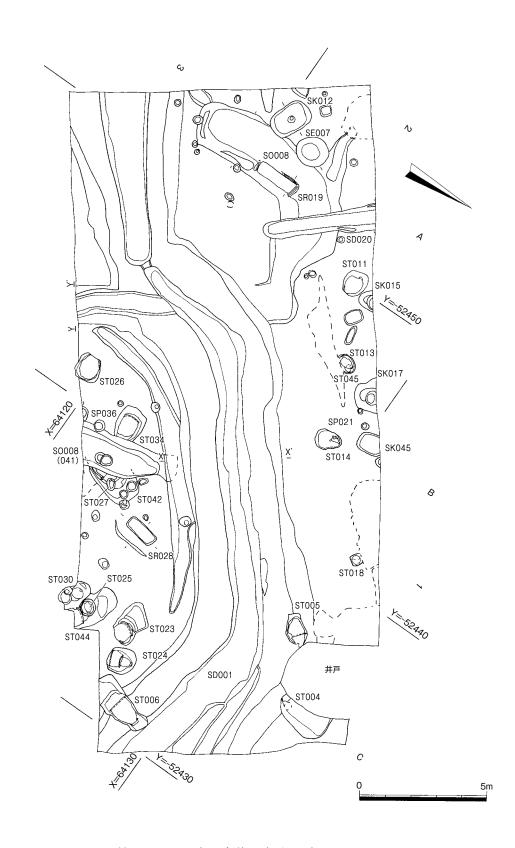
同課事前審查係主任文化財主事 田上勇一郎 (2年度)

森本幹彦

同課事前審查係文化財主事 山本晃平

調查担当: 埋蔵文化財課文化財主事 清金良太

その他、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について事業主様をはじめとする皆様に は多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事に終了することができました。ここに 深く感謝致します。



第 19 図 調査区全体図 (1/150)

# V. 調査の記録

#### 1. 調査の概要

今回報告する那珂遺跡群第 180 次調査区は、博多区東光寺町 1 丁目 14、17 番に所在し、調査前の 現況は標高約 6.8 mを測る家屋解体後の平地であった。調査地点は遺跡の北東部に位置し、隣接する 南側では第 177 次調査、北側では 107 次調査が行われ、筑紫通を挟んだ東側では第 102 次調査が行わ れている。その周辺では第 123、132 次調査が実施され、更にその周囲でも数多くの調査が進んでいる。 なお、第 177 次調査では甕棺墓、竪穴式住居、井戸などが検出されている。

「I.遺跡の立地と環境」でも触れたように本調査区は、那珂遺跡群の立地する丘陵は、かつての沖積作用によって細かい開析谷が複雑に入り込む丘陵である。また北側では、浅い谷を挟んで比恵遺跡群が占地する。

調査に入る前の段階で調査区以外の盛土が除去されており、調査の最後に平板測量する必要がでてきた。

調査区は現代の盛土の下、東側では約 GL-50cmで遺構面である鳥栖ローム層が確認された。遺構面は西側が高く、東側は低くなっており、標高は  $5.94\sim6.51$  mを測る。

遺構検出は鳥栖ローム面までを重機で剥ぎ取って実施し、以下は人力による掘削を行った。今回の発掘調査では溝2条、井戸1基、土坑3基、落とし穴1基、墳丘墓1基、土坑墓・木棺墓2基、甕棺墓17基等が確認された。出土遺物量は、コンテナケースにして43箱である。

発掘調査は令和2年4月8日に着手した。まず、発掘機材の搬入やリース機材を搬入した。翌日に重機による表土剥ぎ取りを始め、その後、壁面清掃、遺構面保護、遺構検出を実施し、10日から本格的に遺構検出・遺構掘削、世界測地系によるトラバース杭の設定をおこなった。順次、西側から遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化をおこなった。5月28日に高所作業車を利用して全景撮影を行った。その後、残る図化や甕棺の取り上げ・実測・個別写真撮影等を終え、調査区を埋め戻すとともに、調査区以外の盛土が除去された箇所については平板測量を行った。令和2年6月26日に第180次調査を終了した。

なお、調査対象面積は、 $\lceil W . - 1 .$  調査に至る経緯」のとおり、295㎡であった。調査時の遺構番号は、001から 3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述した。

#### 2. 遺構と遺物

以下、遺構種別ごとに報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における世界測地系による 10 m単位の平面座標を基準とした英字(西から東に $A \sim C$ )と数字(北から南に $1 \sim 3$ )の組み合わせによるグリッド表記を用いる(第 19 図参照)。

#### 1) 溝 (SD)

SD001 (第19図) 調査区の中央を東西に走る溝である。一部南側へ分岐する。東側が西側に比べて約20cm深い。1・2層は弥生時代の甕棺が多量に含まれていたが、3層から江戸時代の土器が出土した。南北方向はSD001 の北側まで続いているように見えるが、北側の深さは約10cmである。深さは北側と南側では差があり出土する土器も違うことから別遺構であり、また南側では江戸時代の土器が検出されたことからSD001 と同じ溝であると判断した。

出土遺物(第 20 図)58・59 は磁器の碗である。58 は全体に灰釉がかけられており、上部には目跡が残る。高台下にも砂の跡が残り、重ね焼きの痕跡が伺える。59 は胎土が淡橙色を呈しており、灰釉が全面にかけられる。底部の多くは欠損する。 $60\cdot61$  はカワラケである。60 は底部糸切、61 はヘラ切りである。62 は瓦質土器の釜の把手である。内外面共に煤が付着し、径 9 mmの穿孔がある。63 は瓦質土器の火舎である。口径は約 27.6cmを測る。外面にはスタンプがみられる。

SD020 (第21 図) 調査区のA - 2で検出した。深さ約0.4 m、幅1.0 mの溝である。なお調査区の中ほどが約0.1 m深い。調査区境界付近から66、67の甕を検出した。

出土遺物(第 21 図)64 は須恵器の坏蓋である。口径約  $13 \, \mathrm{cm}$ 、高さ  $3.3 \, \mathrm{cm}$ を測る。回転ナデがみられる。65 は土師器で甑の把手である。66・67 は須恵器の甕である。66 は口径  $23 \, \mathrm{cm}$ 、復元胴部最大径は  $44.5 \, \mathrm{cm}$ 、高さ  $45.6 \, \mathrm{cm}$ を測る。胴部は約 1/2 が欠損する。外面は平行叩き、内面の上部は円弧状の当て具痕、下部は同心円当て具痕が確認できる。67 は口縁、底部を欠く。

#### 2) 井戸 (SE)

SE007 (第 22 図) 調査区の A-2 区で検出した。径 1.14 m、深さ 1.94 mの井戸である。遺物はほとんど出土しなかった。

出土遺物(第22図)68は須恵器の坏身か皿である。底径約10cmに復元できる。

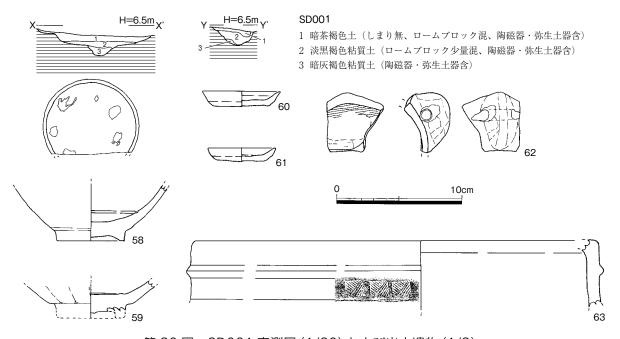
#### 3) 土坑 (SK)

SK012 (第 22 図) 調査区のA-2区で検出した。隅丸長方形で長さ 1.64 m、幅 1.06 m、深さ 0.7 mである。中心部分は深くなっており深さ 1.16 mを測る。木製の柱もしくは杭が建っていたと考えられ、出土遺物は無い。落とし穴の可能性が高い。

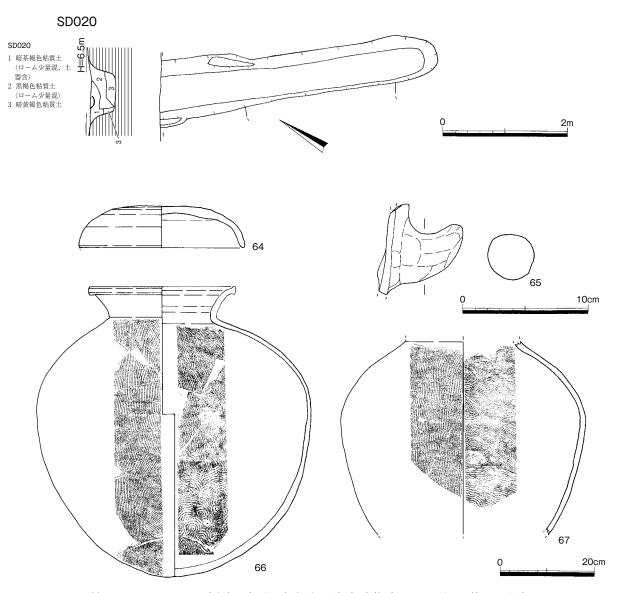
SK015 (第22 図) 調査区のA·B-2区で検出した。覆土は暗茶褐色粘質土で深さ0.2 mである。 弥生土器片が出土した。

SK017 (第22図) 調査区のB-2区で検出した。覆土は暗茶褐色粘質土で深さ0.56 mを測る。 弥生土器片が出土した。周囲の状況から北側には甕棺がある可能性がある。

SKO46 (第22図) 調査区のB-1区で検出し、覆土は暗茶褐色粘質土で幅0.8 m、深さ0.3 mを測る。



第20図 SD001 実測図(1/60)および出土遺物(1/3)

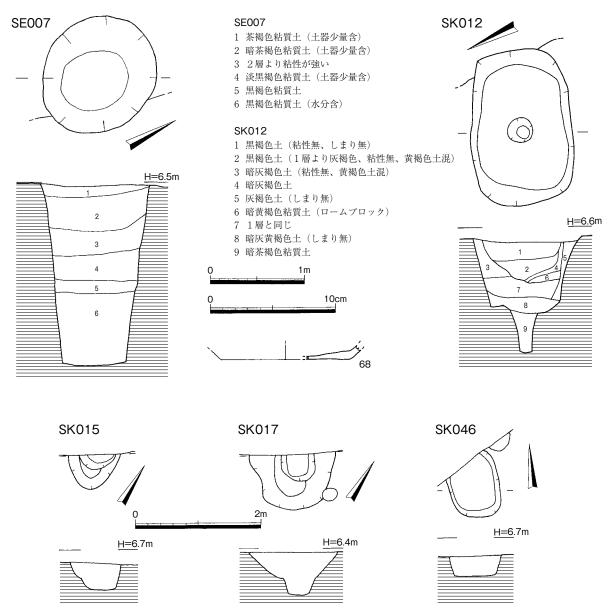


第21図 SD020 実測図 (1/60) および出土遺物 (63 は 1/4、他は 1/3)

#### 4) 方形周溝墓(SO)

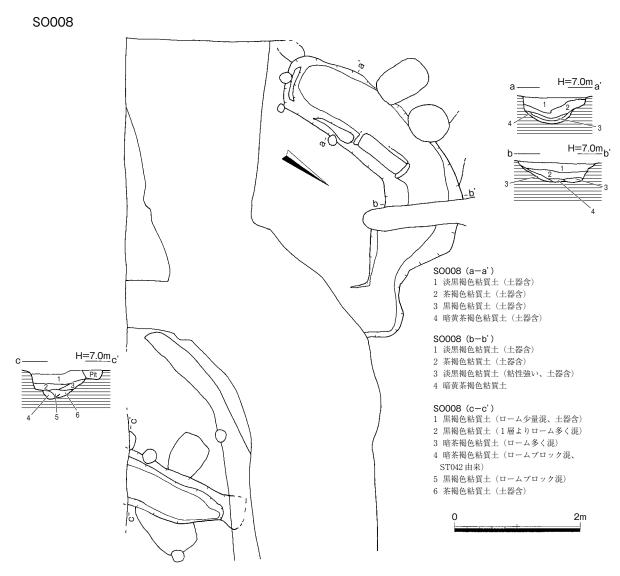
SO008 (第 23 図) 調査区A・B - 2・3 区で検出した。当初別々の遺構であろうと掘削していたが、第 23 図に示した通り、方形周溝墓であることが明らかとなった。一部を江戸時代以降の溝である SD001 に切られ、ST034・042・SR019 といった甕棺墓、木棺墓を切る。南北約 15.6 m、東西約 15.4 m、台状部で南北約 12.1 m、東西約 11.7 m、周溝の深さ約  $0.3 \sim 0.45$  mを測る。主体部は不明である。未調査区にあるかもしれないが、時間的制約で調査は断念した。黒褐色粘質土の 1 層は甕棺片ばかりが出土したが、2 層は甕棺片と共に弥生土器・古墳時代前期初頭の土器が出土した。古墳時代前期初頭の土器は下の層(3 層・4 層)ほど多い印象を受けるが個体数は少ない。また、方位はほぼ正方位であり、比恵・那珂遺跡を走る道路状遺構とは方位がずれる。  $\Pi$  B  $\sim$   $\Pi$  C 期か。

出土遺物(第 24 図)紙幅の関係もあり、下層から出土した土器を中心にとりあげた。 $69 \sim 73$  は 弥生土器である。 $69 \cdot 70$  は甕の口縁部である。69 は口径約 25cmを測る。70 は丹塗りの甕で口縁下部 に M 字突帯が巡る。71 は壺の口縁部である。72 は高坏で丹塗りをほどこす。 $73 \cdot 74$  は甕の底部である。73 は底径 8.6cmを測る。74 は底径 8.6cmで外面はハケ目、内面はナデ調整が確認できる。 $75 \sim 77$  は



第22図 SE007実測図(1/40)および出土遺物(1/3) SK012·015·017·046実測図(1/40、1/60)

土師器である。75 は古墳時代前期初頭の壺である。口径約 22cm、胴部最大径 24cm、底部の穿孔径は約 2.5cmである。頸部に 1 条突帯を巡らす。焼き具合によるものか、全体的に橙褐色であるが、胴部は一部淡橙褐色から暗黄褐色である。調整は外面が摩滅して不明であるが、内面はハケ目が確認できる。76 は四連壺であろうか。77 の脚が付く可能性もある。精製された小型の壺を 4 個体組み合わせたものと考えられる。『那珂 24』『博多 106』に類例がある。『那珂 24』の三連壺と似たような機種であると考えられるが、76 には壺と壺をつなぐ連接部分があり、周りを精製粘土で充填接合したような痕跡は認められない。78 は SO041 の上層から出土した甕である。甕の大部分が残り、口径 45.9cm、高さ 51.1cmが残る。頸部に 1 条突帯を巡らす。口縁部から突帯までは横ナデ、突帯から下はハケ目調整である。焼成は良好で胴部に黒斑が認められる。胎土は橙褐色から淡橙褐色である。79 は鉄斧である。SO008 の下層から出土した。全面が鉄錆に覆われていたため、器形は不明である。幅 3.4 × 2.9 cm、厚さ 1.2cmが残る。表面の穴は剥離したものであろうか。板状の鉄を曲げており、中は空洞である。



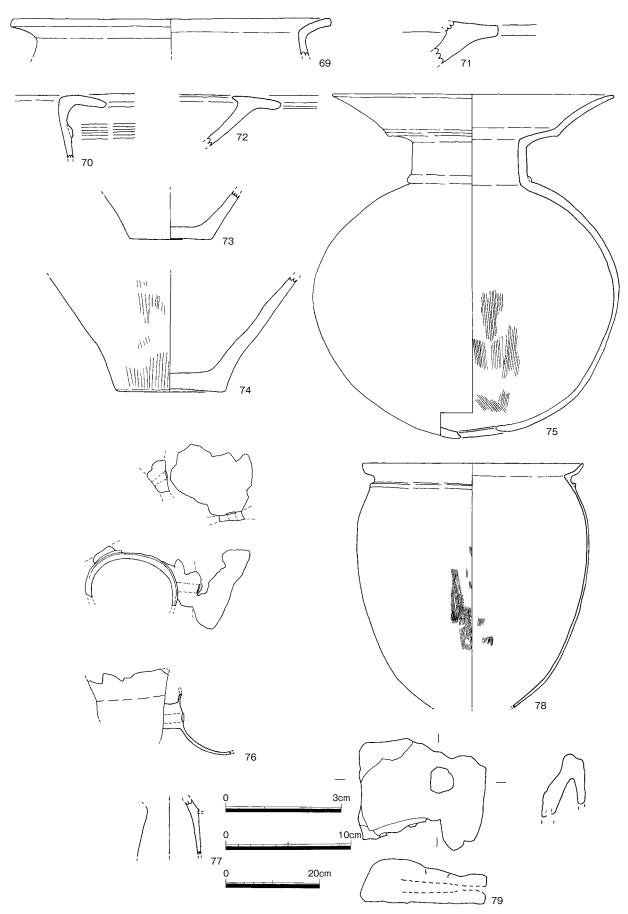
第23図 SO008 実測図 (1/60)

#### 5) 土坑墓・木棺墓 (SR)

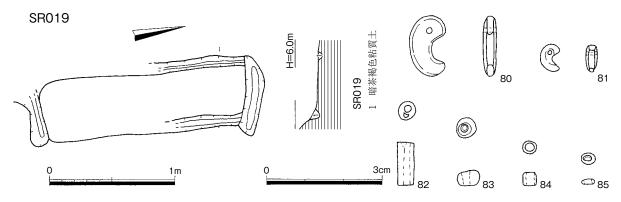
SR019 (第 25 図) 調査区のA-2区で検出した。長さ 1.82 m、幅 0.58 mに復元できる。上部のほとんどすべてを SO008 に切られ、底面と木棺があったであろう溝のみ検出した。溝も北側で確認できたが、南側の横板があったと想定される溝は検出されていない。土器が検出されず時期は不明であるが、玉類が 6 点見つかった。

出土遺物(第 25 図)80・81 は勾玉である。80 は緑泥岩製で、色調は灰色がかった深緑である。長さ 16.8mm、幅 9.9mm、厚さ 3.5mmである。1 か所 1.6mmの穿孔が確認できる。81 はカリガラス製で色調は暗緑色である。長さ 7.3mm、幅 5 mm、厚さ 3 mmを測り、孔径 1 mmの穿孔が確認できる。82 は壁玉製の管玉で、色調は灰色がかった緑色である。長さ 11.5mm、径 5 mm、孔径 2.2mmである。83 ~ 85 はガラス製小玉である。83 はカリガラス製で、淡青色で厚さ 3.1 ~ 4 mm、径 5.2mm、孔径 1.8 ~ 2.4mmを測る。84 はソーダ石灰ガラス製で、淡青色を呈し、厚さ 3.3mm、径 3.7mm、孔径 2.6mmを測る。85 はカリガラス製で、淡青色で厚さ 1.7mm、径 3.1 ~ 3.3mm、孔径 1.5 ~ 2 mmである。

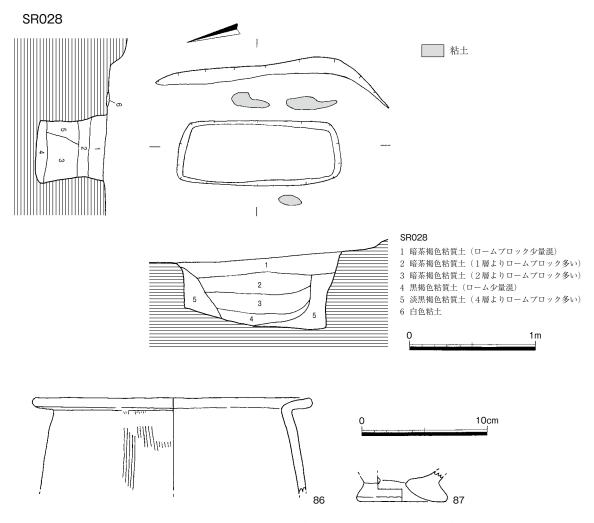
SRO28 (第 26 図) C - 2 区で検出された。1.30 × 0.51 mの方形の土坑墓で、深さ 0.49 ~ 0.6 m



第 24 図 SO008 出土遺物実測図 (79 は 1/1、75 は 1/4、78 は 1/8、他は 1/3)



第25図 SR019 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/1)



第26図 SR028 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)

を測る。東側および南東側は地表面から1段下がり(最大12cm)、段落ちと墓壙の間に粘土が確認された。粘土は墓壙の西側でも見つかっている。段落ちは墓壙に沿うように検出されており、木蓋が想像されるが、木蓋が腐敗して検出されなかったのであろう。

出土遺物 (第26図) 86 は甕の口縁部から胴部にかけてである。口縁は逆L字状に曲がり、ハケ目が確認できる。87 は甕の底部である。底部中央に穿孔が確認できる。

#### 6) 甕棺墓 (ST)

北側では削平により残存状況が良好ではないものが多いが、弥生時代の中期後半から後期前半の甕棺墓が16基検出された。

ST004 (第27図) 調査区のC-1区で検出した甕棺である。墓壙・甕棺の大部分を現代の井戸を掘削する際に破壊されており、墓壙の一部と下甕の底部付近のみが残る。墓壙は北側・西側の大部分を井戸により破壊されており、不明瞭な所が多いが、深さ約0.35 mが残る。主軸方位はN-8°-E、埋置角度は8°を測る。成人棺であろうか。

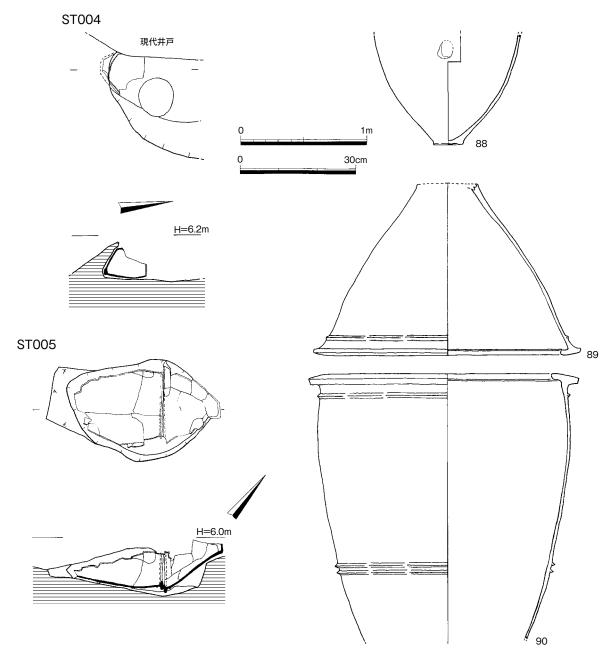
出土遺物 (第 27 図 88) 大部分を近代の井戸により破壊されており、下甕の底部付近のみが残る。 88 は底径 7.8cm、残存器高 28.9cmが残る。胴部中央下寄りに穿孔が確認できる。調整は摩滅しており 不明である。焼成は良好。色調は橙褐色で、胎土に径 1~4 mmの砂粒が確認できる。また黒斑が確認できる。

ST005(第 27 図)調査区のC-1 区で検出した成人棺である。棺の組み合わせは上棺が鉢、下棺が甕の組み合わせとなる成人用の合口式甕棺である。墓壙・甕棺の大部分を江戸時代のSD001、近代の井戸に切られており、墓壙の規模等は不明であるが、階段状にステップが付くタイプである。上甕の上部は墓壙内のステップに置く。主軸方位は $N-51^\circ-E$ 、埋置角度は不明である。 $K \coprod a$  期の甕棺であろう。

出土遺物 (第 27 図 89、90) 89 は鉢である。口径約 70.1cm、底径約 16.2cm、残存器高 45.3cmが残る。口縁部は「T」字状の口縁を有し、その上に 1 条三角突帯が巡る。調整は口縁部から三角突帯までを横ナデ、口縁部付近以外は内外面共にナデ調整がみられる。色調は淡黄褐色で黒斑が確認できる。焼成は良好で、胎土は緻密で径 1 ~ 3 mmの砂粒を含む。90 は大型の甕で胴部下半部から底部は SD001により欠損する。口径約 69.2cm、残存器高 70.5cmが残る。口縁部には「T」字状の口縁を有し、口縁直下に 1 条、胴部中央下よりに 2 条の三角突帯を巡らす。口縁部から口縁直下の突帯までを横ナデ、口縁部付近以外はナデ調整が確認できる。色調は暗橙褐色で、焼成は良好である。胎土は緻密で径 1 ~ 4 mmの砂粒を含む。

ST006(第 28 図)調査区のC-2区で検出した。棺の組み合わせが独特で、小型の甕(小児棺)を墓壙内にはめ込み、甕の底部を打ち欠いたものを挿入している。三連棺などとは違う形態である。墓壙、甕棺の多くを SD001 に切られる。墓壙は長く、底面の南側は 1 段上がりテラス状になる。上甕は無く、木蓋があったと考えられ、木蓋と甕を密着させたであろう粘土も検出されている。墓壙は残りがいい所で幅  $1.08~\mathrm{m}$ 、深さ  $0.7~\mathrm{m}$ である。主軸方位は  $N-22^\circ-\mathrm{E}$ 、埋置角度は  $0^\circ$ を測る。中甕の口縁部付近には粘土が確認できた。 $K~\mathrm{III}$   $b~\mathrm{IIII}$   $b~\mathrm{IIIII}$   $b~\mathrm{IIII}$   $b~\mathrm{IIIII}$   $b~\mathrm{IIII}$   $b~\mathrm{IIII}$ 

出土遺物(第 28 図 91、92)先に触れたとおり、木蓋に下甕があるタイプと想定し掘削していたが、木蓋・中甕(91)・下甕(92)であった。91 は口径 75.6cm、高さ約 102cmが残る。底部は打ち欠いており、この下に 92 が確認できた。口縁部は「T」字状の口縁を有し、断面四角の突帯が口縁直下に 1 条巡る。また、胴部中央下よりに断面三角の突帯が 2 条巡る。調整は口縁部を横ナデ、胴部はナデが確認できるが大部分は摩滅している。焼成は良好で、色調は外面が橙褐色からにぶい褐色、胎土に径 4mm以下の砂粒を含む。胴部上方に径 12cmの黒斑があり、支点としての跡と考えられ、黒斑は底部付近にも広がっている。(『弥生人のタイムカプセル』 福岡市博物館 1998 でタイプ B としたものである。)92 は口径約 30.6cm、高さ 10.2cmが残り、その多くが SD001 に切られる。調整は全体的に摩滅しており不明である。焼成はやや軟化、色調は橙褐色である。胎土は緻密で径 2 mm以下の砂粒を含む。91 の底部付近の径は 19.4cmしかなく、何か別の用途があり打ち欠いたのであろうか。想像になっ



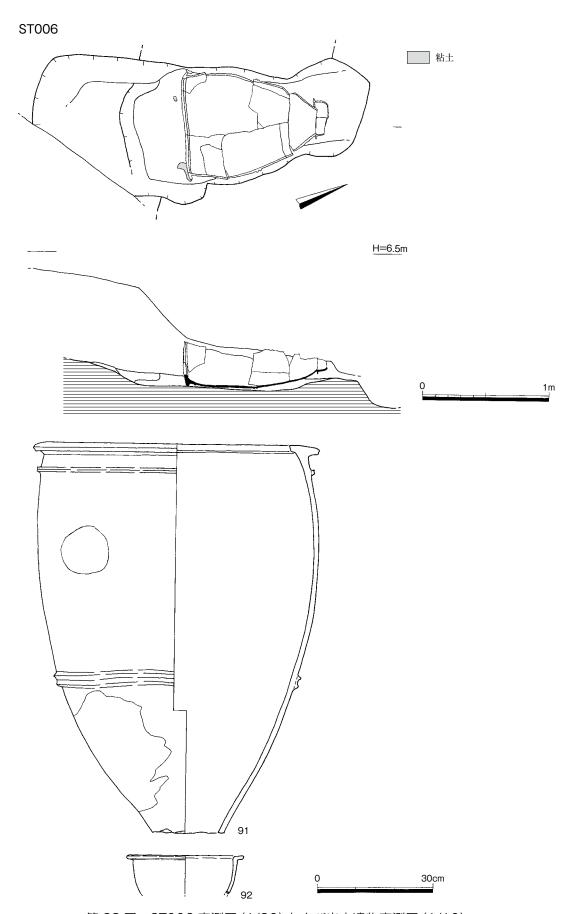
第 27 図 ST004 · 005 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/10)

てしまうが、91 の焼成後、底部に欠損がみつかり、そのために92 を用いたとは考えられないだろうか。 類例を待ちたい。

ST011 (第 29 図) 調査区の A-2区で検出した成人棺である。単棺であろうか、上甕があった 形跡は認められなかった。墓壙の上部は削平を受け、斜抗のみが残る。斜坑の規模は  $1.08\,\mathrm{m}\times0.92\,\mathrm{m}$ 、深さ  $0.42\,\mathrm{m}$ である。主軸方向は  $N-58^\circ-W$ 、埋置角度は  $44^\circ$ である。時期は  $K \coprod b$  期の甕棺である。

出土遺物 (第 29 図 93) 93 は口径約 44.2cm、底径 11.6cm、高さ 85.3cmを測る。「T」字状口縁直下に 1条断面三角の突帯が巡り、胴部中央に 2条の三角突帯が巡る。頸部は窄まり、胴部中央やや上で最大径 59cmとなる。口縁部とその直下では横ナデが確認できる。焼成は良好で、色調は淡橙褐色である。胎土は径  $1\sim5$  mmの砂粒が確認できる。中心部付近に黒斑が確認できる。

ST013 (第 29 図) 調査区のB – 2 区で検出した小児棺である。墓壙は  $0.77~\text{m} \times 0.55~\text{m}$ の楕円形を呈し、深さ 0.06~mと非常に浅い。すぐ下に ST045 が確認された。主軸方向は N –  $173^\circ$  – W、埋

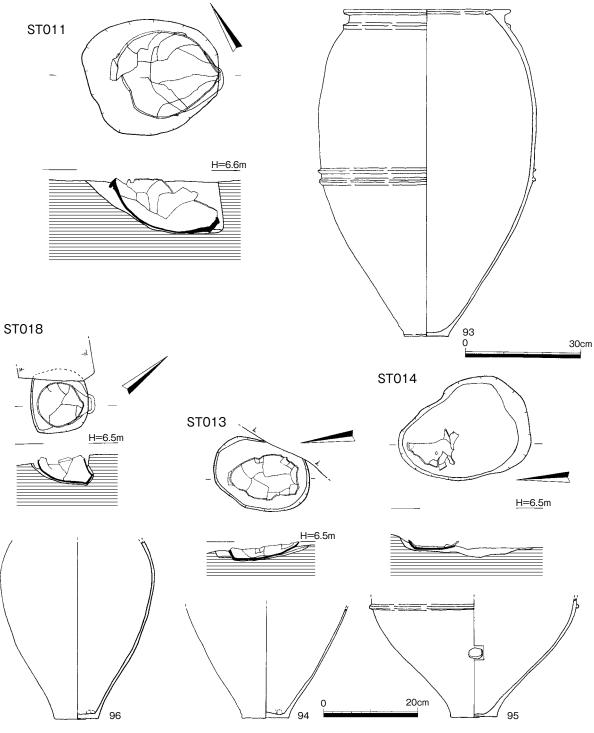


第 28 図 ST006 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/10)

置角度は34°である。

出土遺物 (第29図94) 底径 9.8cm、高さ約50cm程が残るが、非常にもろく、上部まで接合できなかった。底部付近に指押さえ痕が残るが、それ以外は摩滅しており不明である。焼成はやや軟化し、色調は橙褐色土である。

STO14 (第29図) 調査区のB - 2区で検出した小児棺である。ほとんどが削平されており、一部のみ検出できた。墓壙は  $1.05~\text{m}\times 0.78~\text{m}$ の楕円形で、深さ約 0.1~mが残る。主軸方位は N -  $177^\circ$  - E、埋置角度は  $39^\circ$  を測る。時期は K IV a 期の甕棺である。



第29図 ST011·013·014·018 実測図 (1/30)) および出土遺物実測図 (93は 1/10、他は 1/8)

出土遺物 (第 29 図 95) 底径約 9.8cm、高さ約 25cmで、小児棺の 1/4 程度が残る。胴部に断面方形の突帯が 1 条巡り、穿孔が確認できる。焼成は良好で色調は淡黄褐色を呈する。胎土は径  $2\sim5$  mm の砂粒がみられる。胴部中位に突帯は巡らない。

STO18 (第 29 図) 調査区のB – 1 区で検出した小児棺である。墓壙は方形で 1 辺は 0.46 m、斜坑の深さは 0.24 mである。主軸方位が N –  $140^{\circ}$  – W、埋置角度は  $36^{\circ}$  を測る。

出土遺物 (第29図96) 口縁部付近を欠損する。底径9.0cm、高さ37.5cmが残る。外面は摩滅して不明であるが、内面にナデが確認できる。また、底部付近には指押さえ痕がみられる。焼成は良好で、色調は明橙褐色から明茶褐色である。胎土に径1~5 mmの砂粒を含む。

ST023 (第30 図) 調査区のC-2区で検出した成人棺である。甕棺が、集中して確認できた地域である。下甕はほとんど検出されたが、上甕はほぼ潰れていた。呑口の甕棺であろうか。墓壙の入口は長く、現況の長さ  $1.58\,\mathrm{m}$ 、幅  $0.9\sim0.11\,\mathrm{m}$ 。深さ  $0.68\,\mathrm{m}$ と不整形であるが西側が東側に比べて広い。墓壙内には、約  $0.2\,\mathrm{m}$ のステップ状の段が 1 段確認できる。主軸方位は  $N-66^\circ-W$ 、埋置角度は  $34^\circ$ である。時期は  $K \coprod b$  期の甕棺である。

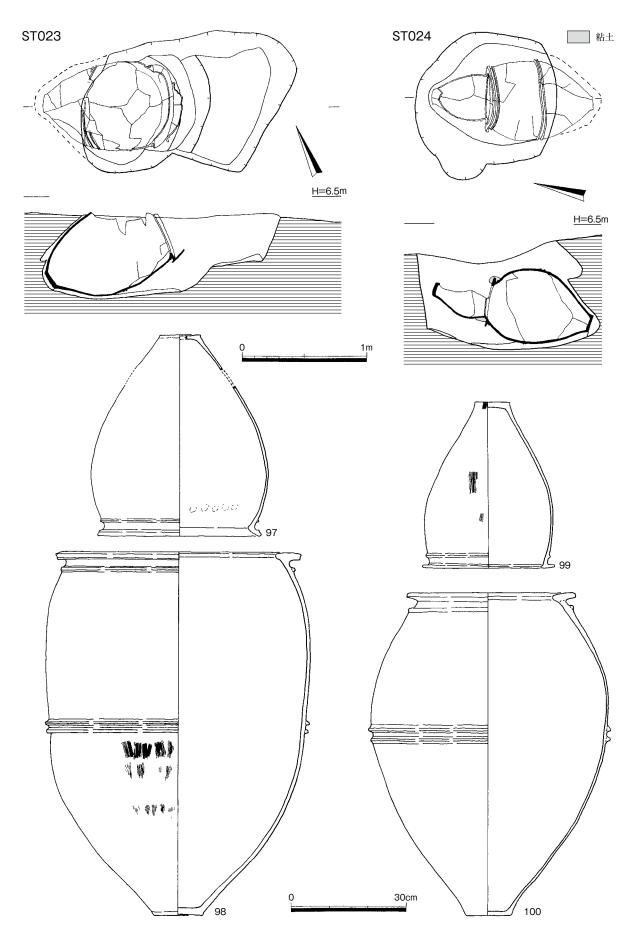
出土遺物(第30図97、98)97は上甕である。口径約43cm、高さ50cm程であろうか。底径約10.8cmに復元できる。最大径は胴部中ほどで46.8cmを測る。逆「L」字状の口縁を有し、1条の三角突帯が巡る。調整は外面の口縁部から突帯にかけて横ナデが確認でき、内面は指押さえ痕が見られる。焼成は普通で、色調は淡黄橙褐色である。胎土に径1~6mmの砂粒を含む。98は口径65cm、底径26cmである。最大径は胴部の上部にあり69.9cmを測る。「T」字状の口縁を有し、口縁直下に1条、胴部中位に2条の断面方形の突帯が確認でき、底部はやや上げ底である。外面にはハケ目がみられ、内面には指押さえ痕が確認できる。焼成は良好である。色調は基本的に橙褐色であるが、上部、胴部中位の突帯は橙褐色が強く、また胴部下部に幅11cm程の淡橙褐色の箇所が帯状に確認できる。粘土帯の違いと考えられる。

STO24 (第30 図) 調査区のC-2区で検出した。ほぼ完形の甕棺で、成人棺の下甕に、小児棺で使われる甕を上甕にしている。合口の甕棺墓であり、上甕と下甕は粘土に覆われていた。墓壙の入口は長さ  $1.12\,\mathrm{m}$ 、幅  $1.04\,\mathrm{m}$ 。深さ約  $0.6\sim0.82\,\mathrm{m}$ あり、階段状のステップは確認できなかった。墓壙内には掘り直しのような跡が検出されている。主軸方位は  $N-15^\circ-W$ 、埋置角度は  $17^\circ$ である。時期は  $K \coprod b$  期の甕棺である。

出土遺物(第30図99、100)99は小児棺サイズの上甕で口径38.5cm、底径9.4cm、高さ34.9cm を測る。「T」字状の口縁を有し、口縁下に断面三角の突帯が1条巡る。外面は口縁部から突帯までを横ナデ、突帯から下はハケ目調整、内面はナデが確認できる。焼成は良好で、色調は橙褐色を示す。胎土には径1~3mmの砂粒を含む。100は口径44.2cm、底径12.1cm、高さ85.4cmを測る。逆「L」字状の口縁を有する。口縁部下には断面三角突帯が1条、胴部中位に断面四角の突帯が2条巡る。内面にナデがみられる。焼成は良好で、色調は橙褐色である。胎土は径1~4mmの砂粒が混じる。胴部上位には黒斑が確認できる。

ST025 (第 31 図) 調査区の C-2 区で検出した合口の小児棺である。墓壙は、ST044 と同じ黒褐色粘質土でありわからなかった。主軸方位は  $N-126^\circ-E$  で、埋置角度は  $47^\circ$  であった。時期は  $K \coprod c$  期の甕棺である。

出土遺物(第31図101、102)101は口径26.6cm、高さ約15.6cmが残り、逆「L」字状の口縁を有する。焼成は良好で、色調は橙褐色である。胎土には径3mmの砂粒が混じる。102は口径32.5cm、底径8.6cm、高さ37cmを測る。上甕と同じく逆「L」字状の口縁を有する。口縁部は横ナデ、外面に



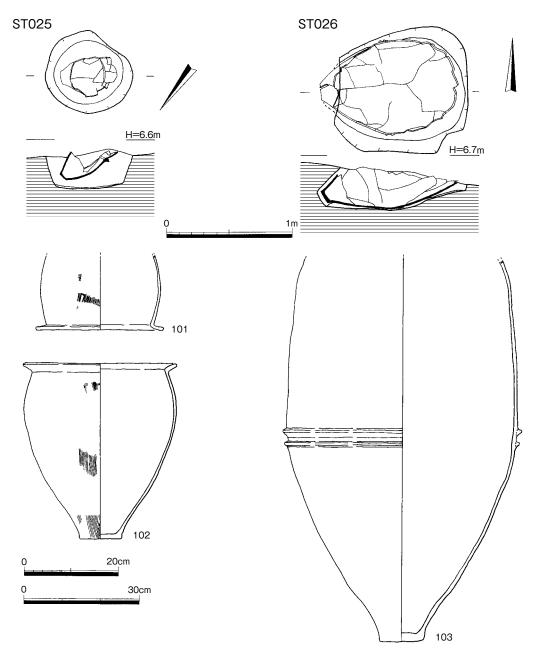
第30図 ST023·024 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/10)

はハケ目、内面はナデが確認できる。焼成は良好で、色調は橙褐色である。胎土は径  $1\sim3\,\mathrm{mm}$ の砂粒がみられ、内側に黒斑がある。

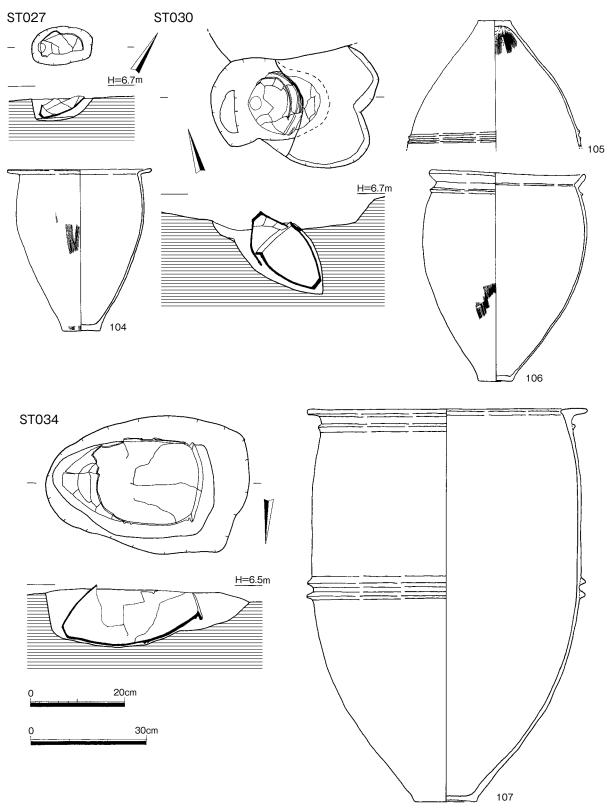
ST026 (第31図) 調査区のB-3区で検出した成人棺である。墓壙と甕棺は削平を受けており、深さ約 $0.33\,\mathrm{m}$ が残る。主軸方位はN-88°-E、埋置角度は31°である。時期は $K\,\mathrm{III}\,\mathrm{a}$ 期の甕棺である。

出土遺物(第 31 図 103) 口縁部は削平により不明である。底径  $11.6 \, \mathrm{cm}$ 、高さ  $100.2 \, \mathrm{cm}$ が残る砲弾型の甕棺である。胴部に断面方形の突帯が 2 条巡る。焼成は良好で、色調は淡橙褐色から橙褐色である。胎土に径  $3 \sim 8 \, \mathrm{mm}$ の砂粒が混じる。また、黒斑が上部と下部に確認できる。(『弥生人のタイムカプセル』福岡市博物館  $1998 \, \mathrm{cot} \, \mathrm{A} \, \mathrm{947} \, \mathrm{C} \, \mathrm{L} \, \mathrm{th} \, \mathrm{ord}$  のである。)

ST027 (第 32 図) 調査区の B - 2 区で検出した小児棺である。埋土は黒褐色土で ST027 の下にある ST042 と見分けがつきにくかった。墓壙の長さ  $0.48~\rm m$ 、幅  $0.3~\rm m$ 、深さ  $0.19~\rm m$ が残る。主軸方位は N - 59° - E、埋置角度 46° を測る。時期は K  $\rm III$  c 期の甕棺である。



第31図 ST025・026 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (101・102 は 1/8、103 は 1/10)



第32図 ST027 · 030 · 034 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (104 ~ 106 は 1/8、107 は 1/10)

出土遺物 (第 32 図 104) 口径約 30.7cm、底径 7.2cm、高さ 34.1cmの小児棺である。逆「L」字状の口縁を有する。口縁部は横ナデ、外面にはハケ目が確認できる。焼成は良好で、色調は橙褐色である。胎土は径  $3\sim5$  mmの砂粒を含む。

ST030 (第 32 図) 調査区のC-2区で検出された小児棺である。甕棺の一部が見えていたため 甕棺墓と思い掘削してしまったが、墓壙東側に深さ約 0.2 mの遺構が 2 つあった可能性が高い。甕棺墓を含めた 3 つの遺構の埋土は黒褐色土であった。墓壙は径約 0.7 mの不整形な円形で、深さ約 0.6 mである。斜坑が 0.43 mと深くそこから 1 段上がるとみられる。主軸方位は  $N-73^\circ-W$ 、埋置角度は  $37^\circ$ である。 177 次調査の ST100 と同じタイプであり、 KW a 期の甕棺である。

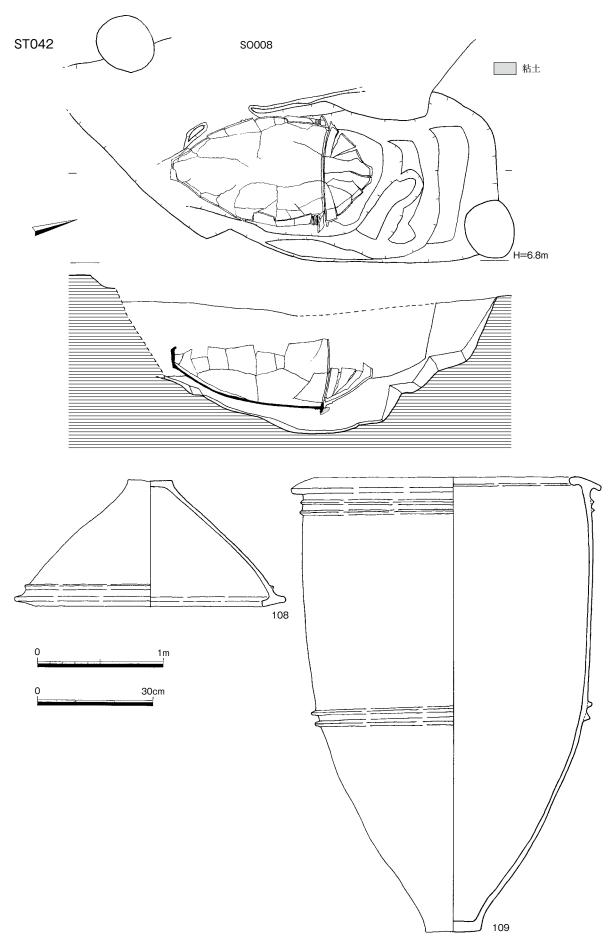
出土遺物(第 32 図 105・106)105 は底径 8.5cm、高さ約 33.5cmで、胴部上半部から口縁部を打ち欠いている。底部が厚く、胴部中位に 2条の断面三角突帯がみられる。調整は内面底部にハケ目と指押さえ痕が確認できる。焼成は良好で、色調は明黄褐色であった。胎土には砂粒が混じり、外面に黒斑がある。106 は口径 40.2cm、底径 8.3cm、最大径 43.1cm、高さ 54.3~ 55.5cmを測る。口縁の端部が上がる逆「L」字状の口縁を有し、口縁下に断面三角の突帯が 1 条巡る。口縁部とその下の突帯までを横ナデ、外面にハケ目が残る。焼成は良好で、色調は淡黄褐色土である。胎土には砂粒を含み、黒斑が確認できる。

ST034 (第32図) 調査区のB – 2区で検出した成人棺である。上甕が墓壙内には無く、単棺であろうか。上甕は確認できなかった。墓壙は  $1.11~\text{m} \times 1.62~\text{m}$ 、深さ 0.46~mが残る。階段状に上がるタイプであるとみられる。また甕棺の口縁部が斜坑より飛び出して検出されている。主軸方位は N –  $87^\circ$  – E で、埋置角度は  $26^\circ$  である。年代は K III b 期の甕棺である。

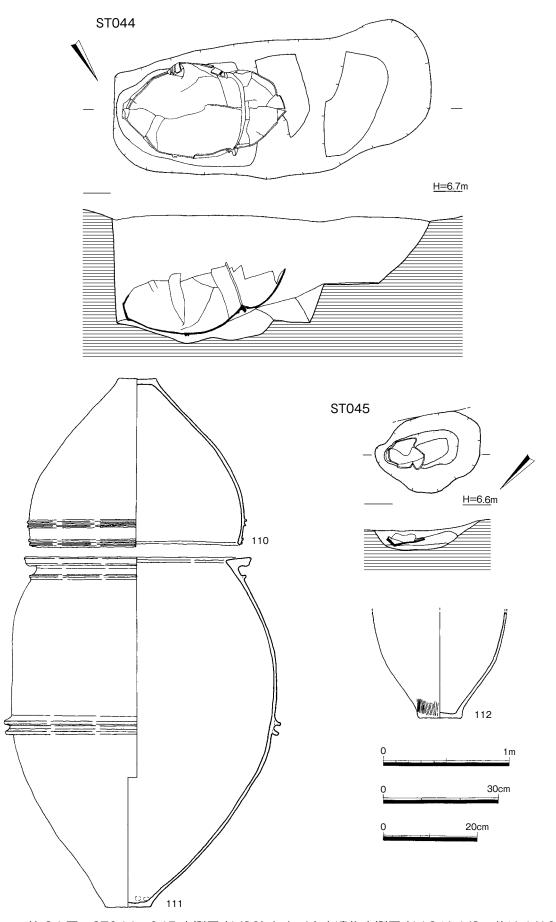
出土遺物 (第 32 図 107) 107 は口径 74.0cm、底径 16.4cm、高さ 103.1cmを測る。「T」字状の口縁を有し、口縁下には突帯が1条ある。また、胴部中位やや下に2条の突帯を有する。底部は非常に薄く厚さ1.2cmである。砲弾型の甕棺であるが、胴部にかけて、やや膨らみがみられる。全体的に非常に薄い。調整は口縁から口縁下の突帯までと、胴部中位の2条突帯を横ナデ、それ以外をナデ整形が確認できる。焼成は良好で、色調は橙褐色土である。胎土には径5mmの砂粒を含み、黒斑が確認できる。

ST042 (第 33 図) 調査区のB -2区で検出した。180 次調査で検出された甕棺墓では、一番大きな甕棺墓である。墓壙の西側の大部分を SO008 に切られ、甕棺の上半分ほどが潰された状態で検出された。墓壙の幅は最大約 1.35 mを測り、下甕の底部方向で幅は減少している。深さは、最大で約 0.94 mが残る。墓壙は階段状に掘られており、1段 0.2 m  $\sim 0.42$  mの段が連なり、階段状に上り下りするタイプである。墓壙の床面は、下甕に沿うように掘られており、下甕の底部方向ではうえに上がる。上甕は階段部分に置かず、粘土により上甕と下甕を密着する。主軸方位は N  $-16^\circ$  – E で、埋置角度は  $0^\circ$  である。年代は K III a 期の甕棺であり、今回調査した中で最も古い。

出土遺物(第33図108・109)108は鉢で口径71.3cm、底径11.4cm、高さ32.8cmを測る。口縁は「T」字状の口縁を有する。内外に口縁が発達し、端部に向かうにつれてうえに上がる。口縁の上には1条、断面三角の突帯が巡る。調整は口縁部と下の突帯を横ナデ、胴部はハケ目の後にナデ消している。焼成は良好で、色調は橙褐色土である。胎土には径3mm程の砂粒を含み、外面の底部と胴部内面に黒斑が確認できる。109は口径82.2cm、底径14.8cm、高さ119.7 cmを測る。口縁は「T」字状の口縁を有し、内外に口縁が発達し、外側は端部に向かうにつれて下に垂れる。口縁の下には2条の断面三角形の突帯を有する。突帯は体部の中ほどやや底部よりにも2条の突帯がある。この突帯は口縁部付近の突帯とは違い、断面がコ字形突帯に近い。胴部上半は直立し、調整は口縁部と突帯部分を横ナデ、それ以外はハケ目の後ナデて、ハケ目をナデ消している。焼成は良好で、色調は橙褐色である。胎土には径3mm程の砂粒を含む。黒斑は上下対に2か所確認できる。



第33図 ST042 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/10)



第34図 ST044・045 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (112 は 1/8、他は 1/10)

ST044 (第 34 図) 調査区のC-2区で検出した。墓壙の大きさは幅約  $1.1 \, \mathrm{m}$ 、長さ  $2.52 \, \mathrm{m}$ の隅丸長方形で、深さは現状で  $1.04 \, \mathrm{m}$ である。墓壙には高さ  $0.3 \, \mathrm{m}$ 程のステップが付き、階段状に上り下りする。上甕を階段のステップに立てかけるように埋葬している。主軸方位は  $N-58^\circ-W$  で、埋置角度は  $15^\circ$ である。年代は  $K \, \square \, \mathrm{b}$  期の甕棺である。

出土遺物(第 34 図 110・111)110 は壺の口縁部から胴部を打ち欠き甕棺の上甕として使用したものである。底径 10.0cm、高さ 43.4 ~ 44.2cmが残る。胴部中央を断面 M 字突帯が 2 条巡る。打ち欠いた箇所は M 字突帯のすぐ下である。内・外面ともにナデ調整が確認できる。焼成は良好、色調はにぶい橙褐色から明橙褐色である。胎土に径 2 mmの砂粒を含む。111 は口径 60.0cm、底径 12.0cm、高さ 90.8cmを測る。口縁下に突帯が 1 条巡る。また、胴部中央には 2 条の突帯が巡る。調整は口縁部から突帯までと胴部中央の突帯を横ナデが確認でき、それ以外は器面がやや荒れるがナデ調整である。焼成は良好で、色調は橙褐色である。胎土に 2 ~ 3 mmの砂粒を多く含む。黒斑が 2 か所確認でき、1 か所は底部から胴部中央に広くみられ、もう 1 か所は反対側の胴部中央より上に確認できる。

ST045 (第 34 図) 調査区のB -2区で検出した。ST045 の上部をST013 が切る。ST013 を取り上げた際に検出された甕棺で胴部から口縁部が欠損している。SD001 には甕棺片が大量に含まれており、ST013 も同じく流れ込みの可能性も考えられる。一部撹乱により消失しているが墓壙の大きさは 0.84 mの楕円形と考えられ、深さは約 0.16 mが残る。主軸方位は N  $-134^\circ$  – W で、埋置角度は  $44^\circ$  である。

出土遺物 (第34図112) 底径 8.8cm、残存高さ 22.3cmを測る。調整は外面の底部付近にハケ目が確認できる。焼成は良好で、色調は黄褐色である。胎土に径1~5mmの砂粒を含む。

#### 7) その他の遺物

最後にピットから出土した遺物について報告を行う。113 は SP003 から出土した須恵器の坏である。114 は SP021 から出土した甑の把手である。115 は SP036 から出土した須恵器の坏でへラ記号が確認できる。

#### 3. 小結

今回の調査では溝(SD) 2条、井戸(SE) 1 基、土坑(SK) 4 基(SK012 は落とし穴の可能性が高い)、方形周溝墓(SO) 1 基、土坑墓・木棺墓(SR)はそれぞれ 1 基、甕棺墓(ST) 17 基を検出した。隣の那珂 177 次、180 次の平板測量のみ行った箇所では竪穴住戸が検出されているが、180 次の調査区内では竪穴住居跡は確認できなかった。

溝は江戸時代(SD001)と古代(SD020)が確認された。また、井戸は古代の時期が想定されるが、遺物は非常に少なかった。

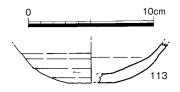
方形周溝墓(SO008)は周溝のみが発掘され、平板図を取る際にも主体部は確認できなかった。削平されてしまったか、発掘調査範囲と平板で図面を取った範囲の間である可能性もある。調査範囲と平板図の間は掘削する予定はないということであったので平板図は作成しなかった。

木棺墓(SR019)は方形周溝墓に切られており、底面のみ検出できたが、勾玉等の玉類がみつかっている。また土坑墓(SR028)は1段窪んだ箇所にある。土坑墓の上部は黒褐色粘質土が堆積しており、3~4 cmを掘り下げる過程で検出した。また、窪みに沿うように粘土が検出されており、木蓋の可能性が想定できる。

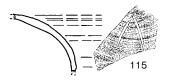
甕棺墓は 17 基検出(表 3 )され、177 次調査を含めると 29 基みつかっている。17 基のうち成人棺は 10 基検出された。那珂遺跡群内において、一つの墓域であったのであろう。甕棺墓が検出された最も古いもので  $K \coprod a$  (ST005、042) であり、177 次調査の成果では  $K \coprod b$  が最古であり、 $K \coprod a$  期

遺構番号(上甕、下甕)	成人棺 / 小児棺	規模(底径・口径・高さ)	胎土	主軸方位	埋置角度	時期	墓壙
ST004	成人棺	$7.8$ cm $\cdot$ $ \cdot$ $-$	橙褐色	N-8° -W	8°	_	_
ST005 (上甕)	成人棺	(16.2cm)·(45.3cm)·70.1cm	淡黄褐色	N E4° E	_	K III a	Ⅰ類
ST005 (下甕)	成人棺	$-\cdot 72.8$ cm $\cdot -$	暗橙褐色	N-51°-E			
ST006 (中甕)	成人棺	$-\cdot75.6$ cm $\cdot$ $-$	橙褐色	N OO° E	O°	K III b	I類
ST006 (下甕)	小児棺	$-\cdot$ 30.6cm $\cdot$ $-$	橙色	N-22° -E			
ST011	成人棺	11.6cm · 44.2cm · 85.3cm	淡橙褐色	N-58° -W	44°	K III b	_
ST013	小児棺	$9.8$ cm $\cdot - \cdot -$	橙褐色	N - 173° - W	34°	_	_
ST014	小児棺	9.8cm·—·—	淡黄褐色	N-177°-E	39°	k IV a	_
ST018	小児棺	9.0cm·-·-	明橙褐色	N-140° - W	36°	_	_
ST023 (上甕)	成人棺	10.8cm · 46.0cm · —	黄橙褐色		34°	K III b	類
ST023 (下甕)	成人棺	26.0cm · 65.0cm · 96.0cm	橙褐色~ 明黄褐色	N - 66° - W			
ST024 (上甕)	小児棺	9.4cm · 38.5cm · 43.9cm	橙褐色	N-15° - W	17°	K III b	Ⅱ類
ST024 (下甕)	小児棺	12.1cm · 44.2cm · 85.4cm	橙褐色	1N-13 - W			
ST025 (上甕)	小児棺	26.6cm·-·-	橙褐色	N-126°-E	47°	K III c	Ⅱ類
ST025 (下甕)	小児棺	8.6cm · 32.5cm · 37.0cm	橙褐色	N-120 - E			
ST026	成人棺	11.6cm·-·-	淡橙褐色	N-88° - W	31°	KIII a	ı
ST027	小児棺	$7.2$ cm $\cdot$ $30.7$ cm $\cdot$ $34.1$ cm	橙褐色	N-59° - E	46°	K III c	ı
ST030 (上甕)	成人棺	$8.5$ cm $\cdot - \cdot -$	淡黄褐色	N-73°-E	37°	KNa	Ⅱ類
ST030 (下甕)	成人棺	8.3cm·40.2cm·54.3~55.5cm	淡黄褐色	N-73 - E			
ST034	成人棺	16.4cm · 74.0cm · 103.1cm	橙褐色	N-87° - E	26°	K III b	I類
ST042 (上甕)	成人棺	11.4cm · 71.3cm · 32.8cm	橙褐色	N-16° - E	O°	KIII a	I類
ST042 (下甕)	成人棺	14.8cm · 82.2cm · 119.7cm	橙褐色	N-10 -E			
ST044 (上甕)	成人棺	10.0cm·-·-	橙褐色	N-58° -W	15°	K III b	Ⅰ類
ST044 (下甕)	成人棺	12.0cm · 60.0cm · 90.8cm	橙褐色	W-00 -W			
ST045	小児棺	$8.8$ cm $\cdot - \cdot -$	黄褐色	N-134°-W	44°	_	_

第3表 那珂遺跡群 180 次調査出土甕棺一覧







第 35 図 ピット出土遺物実測図 (1/3)

から甕棺墓の墓域であったことがわかる。一番新しいものでKIVaに分類できる。また主軸方位は一定ではない。

成人棺 10 基のうち確実に上甕があったものが 5 基検出された。成人棺のうち、時期がわかる甕棺は 9 基あり、ST005、042 は K  $\blacksquare$  a、ST006、011、023、024、034、044 は K  $\blacksquare$  b。 K  $\blacksquare$  c に分類できる甕棺は小児棺(ST025、027)のみである。ST0301 は K  $\blacksquare$  a であった。

177次調査で墓域と生活域の違いについて述べたが、180次調査で、弥生時代・古墳時代の遺構は 甕棺墓・木棺墓・方形周溝墓をはじめとした墓のみであった。次章で述べるが、177次調査の生活域 と墓域の境目が180次調査の東側にあるように考える。次に遺構が確認できるのは古代の井戸であり、 やはり墓域と生活域は分かれていたのではないかと考える。

### VI. 結語

#### 那珂 177 次調査・180 次調査の甕棺墓について

那珂 177 次調査では 12 基(成人棺 6 基)、180 次調査では 17 基(成人棺 11 基)の甕棺墓がまとまって検出されている。時期は、両調査共に K I a から K  ${\rm III}$  c である。結語では混乱を避けるために 177 次調査の甕棺は  ${\rm II}$  でする。また、両調査とも小児棺には棒線を引くものとする。

墓壙 墓壙は縦坑を掘った後、横に掘り進めるとされる。今回の二つの調査で見られた甕棺墓の墓壙を大きく2つに分類する。

I類:地表面から墓壙内へ階段状に下に降り、甕を据え付ける。

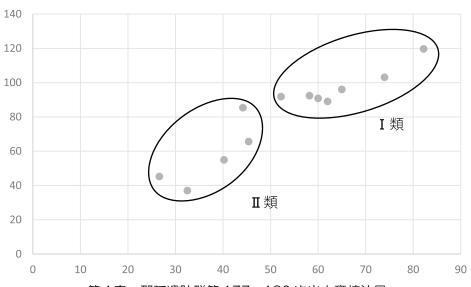
Ⅱ類:地表面から墓壙底部までを0段もしくは1段で降り、甕を据え付ける。

I類に該当するものが  $ST032 \cdot 043 \cdot 062 \cdot 074$ 、 $ST005 \cdot 006 \cdot 023 \cdot 034 \cdot 042 \cdot 044$ 、 I類は  $ST100 \cdot 024 \cdot 025 \cdot 030$  であった。(表 2、3) I類とした甕棺は成人棺が多く、II類とした甕棺は成人棺でも小型の甕棺と小児棺が多い。グラフにまとめたものが表 4 である。縦を下甕の高さ(cm)、横を下甕の口径(cm)で分類している。 I類とII類では甕棺に明らかな差が確認できた。 I類の甕棺の多くは大きく、大きくなればなるほど重くなり、持ち運ぶのに人数がかかると考えられる。そうなった時、 I類の様に階段状に掘ることで、甕棺を墓壙内に挿入しやすくなるのではないだろうか。大きい甕棺は、II類の様に墓壙内との差が大きい場合は挿入しにくいとみられ、また、割れる可能性も出てくる。甕棺が小さい場合は、II類の様に縦に掘ってもそれほど甕棺の重さはなく、少ない人数で甕棺を設置できたのではないだろうか。

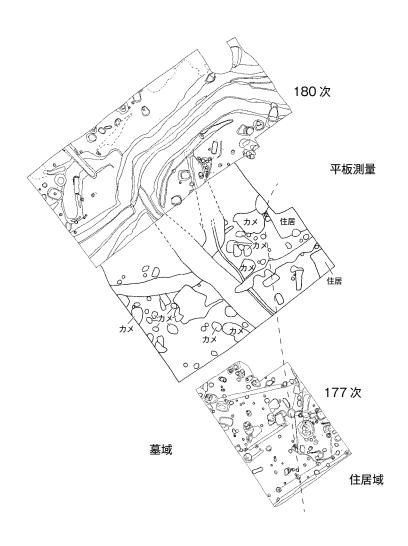
今回の 177・180 次調査では合計 29 基の甕棺墓が出土したが、 $K \coprod a$  以降の甕棺しか出土しなかった。 $K \coprod a$  以前の甕棺墓の墓壙がどうであったかは、また別の機会に譲る。

#### 那珂 177 次調査・180 次調査出土の墓域について

177・180次調査と平板測量を行ったもの(第 36 図)を見ると、土坑墓・甕棺墓・方形周溝墓といった墓域は西側、掘立柱建物・竪穴住居といった居住域は東側に分かれている。削平を受けている可能性もあるが、くっきりと分かれる。時代の流れは土坑墓・甕棺墓→掘立柱建物・竪穴住居→方形周溝墓となっている。あらかじめ、墓域と生活域が設定されていたのではないだろうか。



第4表 那珂遺跡群第 177·180 次出土甕棺法量





第 36 図 那珂遺跡群第 177・180 次調査および平板測量図 (1/400)

# 図 版



177 次調査作業風景



180 次調査作業風景

#### 第 177 次調査



(1) 第 177 次全景(上空から)



(2) 第 177 次南側全景 (東から)



(3) SB068 (西から)



(4) 竪穴住居出土状況(上空から)



(5) SC040 石包丁出土状況(南東から)



(6) SE039 遺物出土状況(東から)

図 版2

第 177 次調査





(1) SE039 (東から)

(2) SK025 (東から)



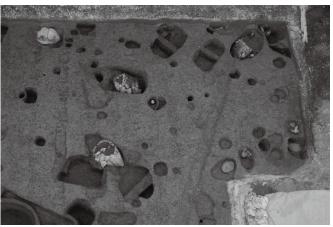
(3) SR051 (南から)



(4) SR052 (東から)



(5) SR057 (東から)



(6) 甕棺墓(上空から)



(1) ST028 (東から)

(2) ST032 (東から)



(3) ST043 (東から)



(4) ST062 (北から)

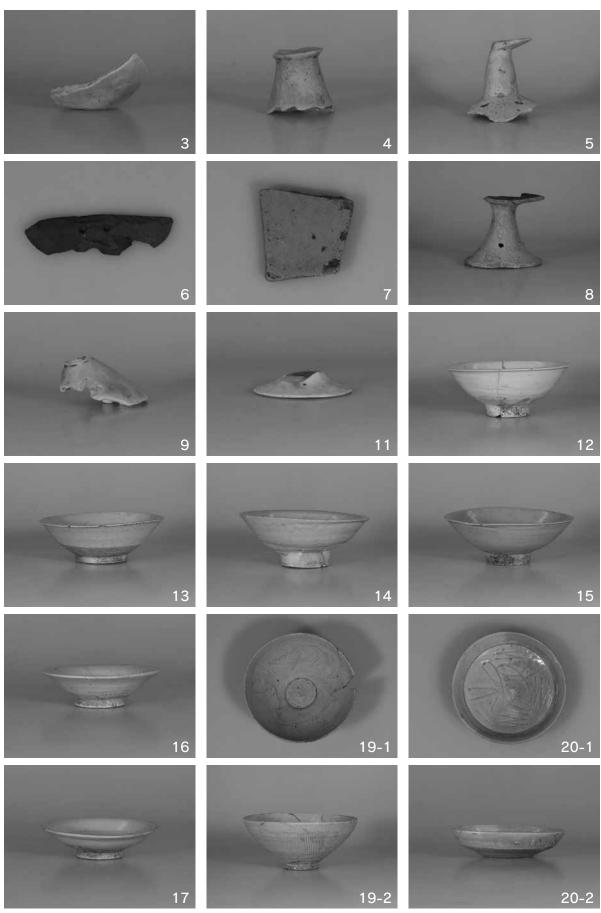


(5) ST087 (西から)

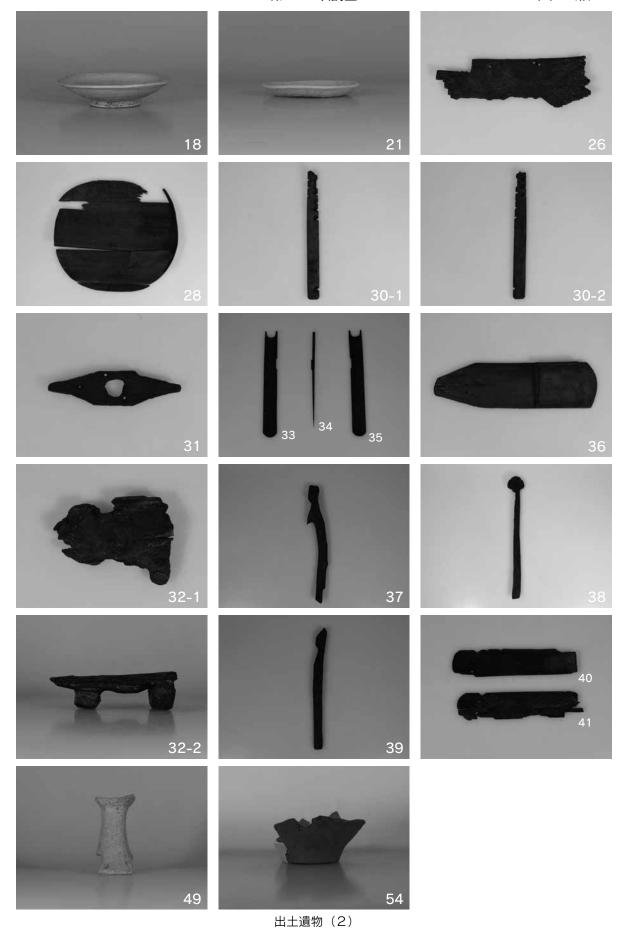


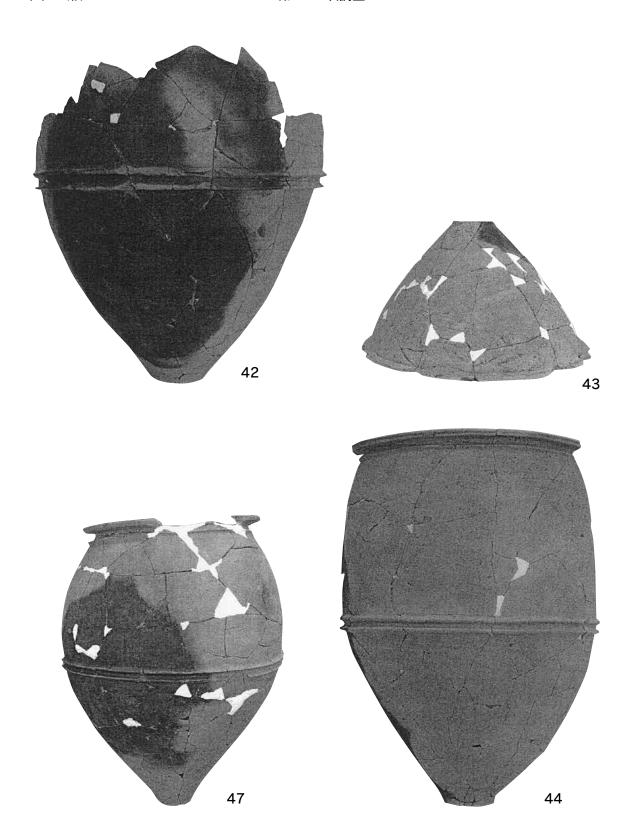
(6) ST100 (西から)

第 177 次調査

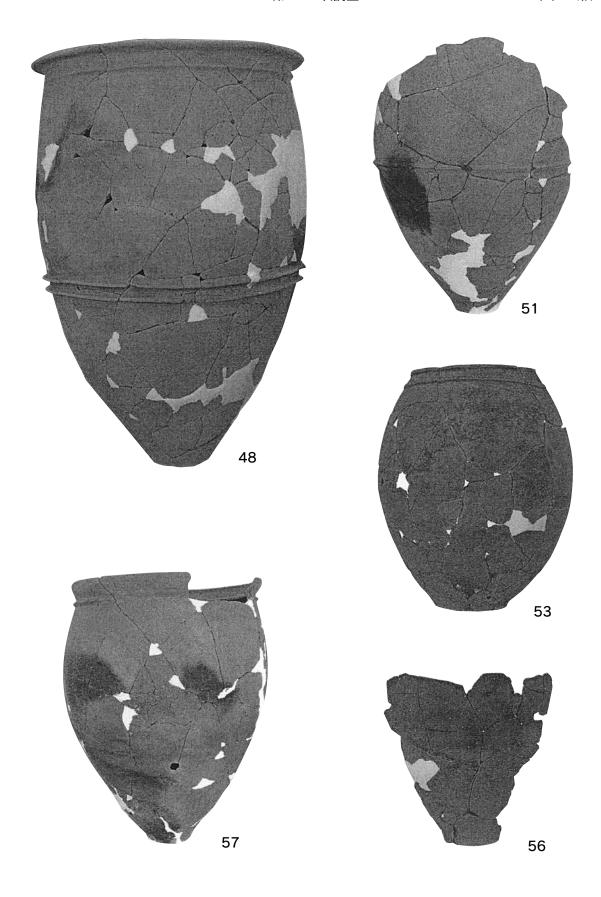


出土遺物(1)





出土遺物(3)



出土遺物(4)



(1) 第 180 次全景(上空南から)



(2) ST026・034・042(上空南から)



(3) ST006・023・024・030・044 (上空南から)

#### 第 180 次調査



(1) SD001A 断面(東から)

\_\_\_\_\_ (2) SD001B 断面 (東から)



(3) SD020 断面(南から)



(4) SE007 (東から)



(5) SK012 断面(北西から)



(6) S0008 (上空南から)





(1) SO008A 断面(南から)

(2) SO008B 断面 (西から)





(3) S0041 (北から)

(4) SR019 (東から)





(5) SR019 勾玉出土状況(西から)

(6) SR019 勾玉出土状況(南西から)





(1) SR019 管玉出土状況(西から)

(2) SR028 (東から)







(4) ST005 (西から)



(5) ST006 (南東から)



(6) ST006 (北東から)





(1) ST011 (南から)

(2) ST013 (北から)







(4) ST018 (東から)



(5) ST023 (北東から)



(6) ST024 (西から)

## 第 180 次調査



(1) ST025 (東から)



(2) ST026 (東から)



(3) ST030 (南から)



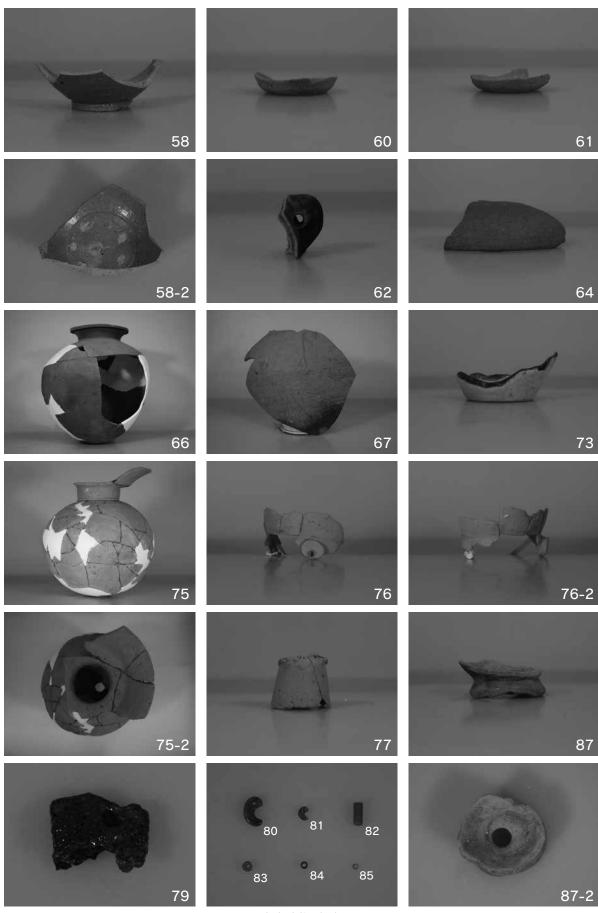
(4) ST034 (南東から)



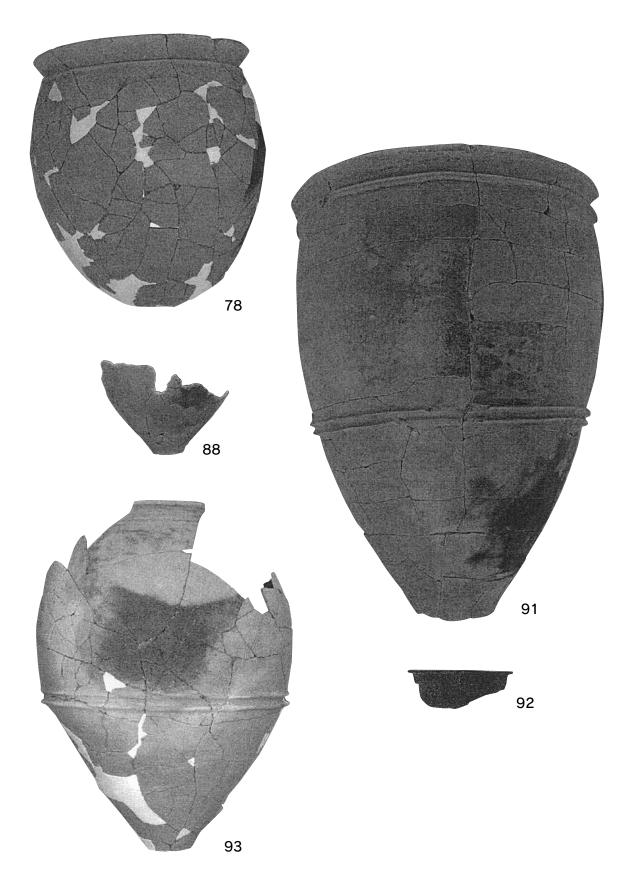
(5) ST042 (東から)



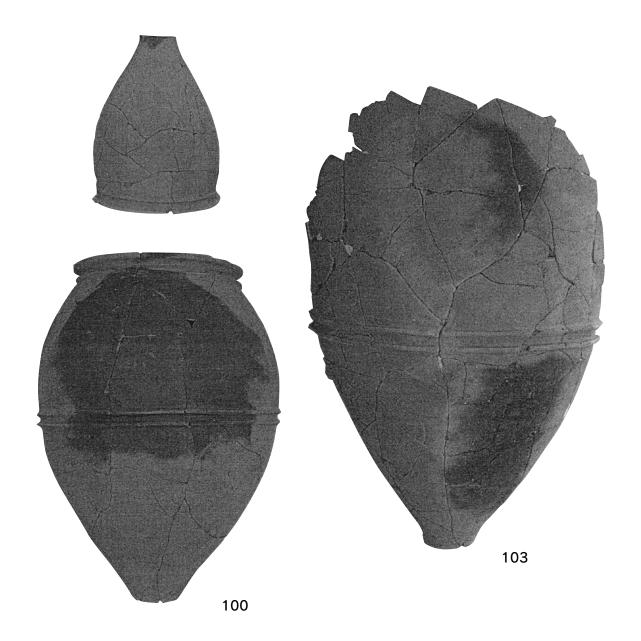
(6) ST044 (北から)



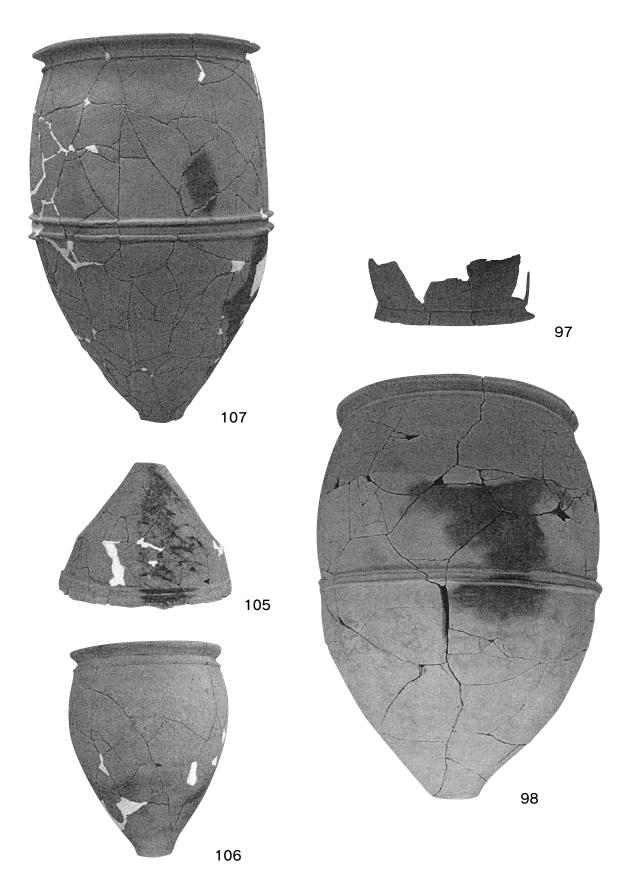
出土遺物(1)



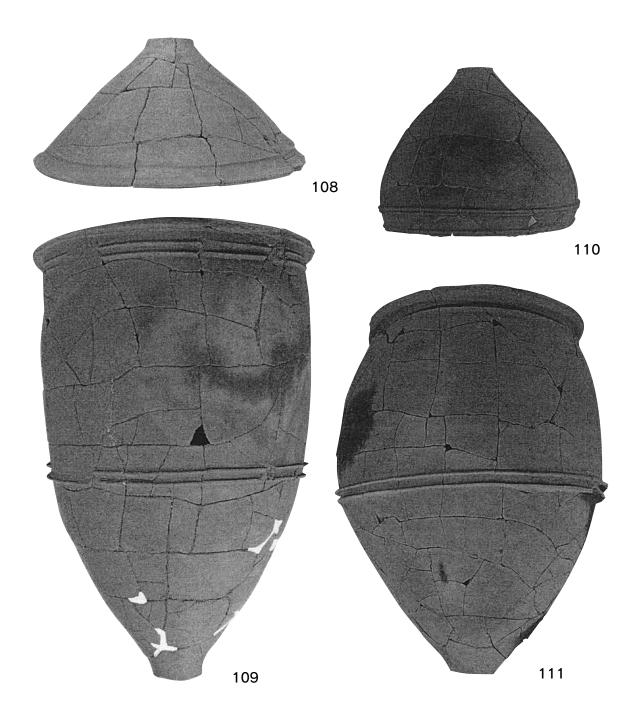
出土遺物(2)



出土遺物(3)



出土遺物(4)



出土遺物(5)

# 報告書抄録

					- */	•			
ふりがな	なか84	一なかいも	せきぐんだい	177 · 180	じちょうさほ・	うこく一			
書 名	那珂 8	4							
副書名	—那珂	遺跡遺跡第	177・180 次	調査報告一					
シリーズ名	福岡市	埋蔵文化財詞	周査報告書						
シリーズ番号	第1442集								
編著者名	清金 良太								
編集機関	福岡市教育委員会								
所 在 地	〒 810-8621 福岡県福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号 TEL 092 - 711 - 4667								
発行年月日	2022年3月24日								
<sup>ふりがな</sup> 所収遺跡名	<sup>ふりがな</sup> 所在地		コー	遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
* ** ** *****************************	なくおかけんかくおかし 福岡県福岡市 はかとくとうこうじ 博多区東光寺		40132	0085	33° 34′ 35″	130° 26′ 06″	20191007 20191120	131.72	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
那珂遺跡群 177 次	集落 弥生時代		C、中世	掘立柱建物、竪穴住居 甕棺墓、土坑墓		弥生土器、鉄器、甕棺、 青磁、白磁、木製品			
要約	の中期か 1棟は大 時期決定	ら後期の早 型で弥生時付	い段階にか 代後期から彩 ていない。!	けて墓域し <sup>*</sup> 咚末期の竪穴 竪穴住居は弱	てと利用され :住居に切られ 你生時代後期ヵ	棟、竪穴住居 、それ以降は ることからそ から古墳時代 <i>の</i>	生活域に変化れ以前と考え	としている。 えられるが、	掘立柱建物の 遺物が少なく
<sup>ふりがな</sup> 所収遺跡名	<sup>ふりがな</sup> 所在地		コー 市町村	ード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
新珂遺跡群 180 次	なくおかけんかくおかし 福岡県福岡市 はかたくとうこうじ 博多区東光寺		40132	0085	33° 34′ 37″	130° 26′ 06″	20200408 20200626	295	記録保存調査
所収遺跡名	種別	重別 主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
那珂遺跡群 180 次	集落	弥生時代、	近世	甕棺墓、土坑墓、方形 周溝墓、溝		弥生土器、甕棺、勾玉、 管玉			
要約	て甕棺墓 管玉、臼 約12 mを	が作られた! 玉3個検出	弥生時代中 されている 「墓を切る。	期から後期を が、墳丘墓に	別めにかけて、 に切られてお	1条検出した 墓域であった り詳しい時期 る溝から江戸	こことが伺え は不明である	る。木棺墓 る。墳丘墓の	からは勾玉2、 大きさは1辺

# 那珂 84

一那珂遺跡群第 177·180 次調査報告— 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1442 集

2022年(令和4年)3月24日

発 行 福岡市教育委員会 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株式会社谷口印刷所 福岡市東区馬出2丁目22-23